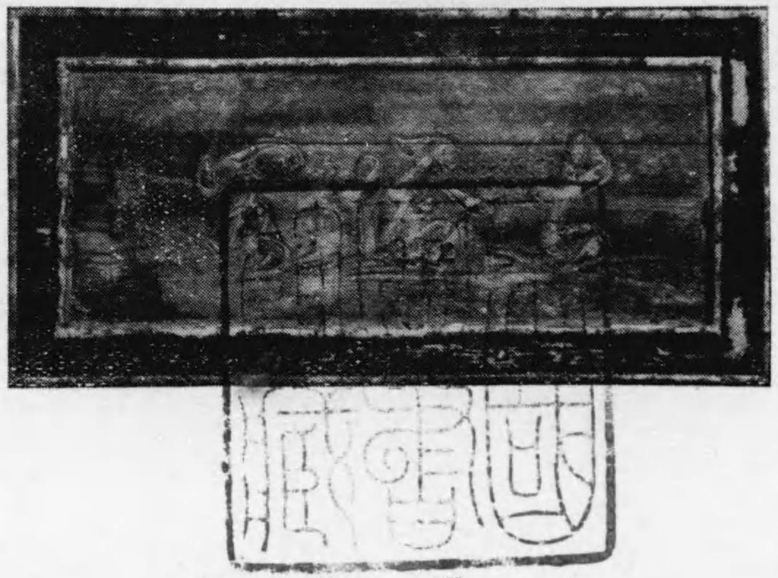
淨土三部經の話

特232
89

始

特232
89



土塔叢書

（1）

淨土三部經の話

天王寺土塔會、前々住上人御覽候テ仰ラレ候、

アレホドノ多キ人トモ地獄ヘオツベシト、不便ニ思召候由仰ラレ候、又其中ニ御門徒ノ人ハ佛ニナルベシト仰ラレ候是又アリガタキ仰ニテ候

（蓮如上人御一代聞書）

序

蓮如上人御一代聞書

一、今ノ人ハ古ヲタヅヌベシ、マタ古ビトハ古ヲヨクツタフベシ、物語ハウスルモノナリ、書シタルモノハウセズ候

（四十五章）

釋尊の金言も筆に殘ればこそ三千年後の今日なほ其教化を聽くことを得る、其教いかに尊くとも口物語なれば其時限りにてあとかたもなく消ゆ、惜しむにも及ばず、今土塔叢書の實現を見る。

「書シタルモノハウセズ候」と。

土塔閣

內容

序說……1
第一講……9
第二講……28
第三講……70

淨土三部經の話

華學默震先生口述
近江幸太郎速記

序說

土塔會の年中行事の一つとして、毎年この八月には「朝の集ひ」といふのが三日間にわたつて催されることになつてゐるさうでありますが、誠に結構なお企であると存じます。ところが本年はどうした御因縁か、私に『淨土三部經』の概要を平易に話して呉れとの依頼を受けましたので、およばず乍ら報謝の一端ともと存じまして、たゞ今から御清聽を煩はす次第であります。

さて『三部經』といふ名稱は、眞宗の方々にとつては寔に親しみ深いもので年忌佛事といふ場合には、僧侶を招いて佛前でこの『三部經』を讀誦して貰ふといふのが慣例になつてゐます。とりわけ大阪附近では、そうした場合が多いやうであります。ところがおかしなことに、一般在家の人達にはその『三部經』といふのは、何々經と何々經とを合せたものであるかをさへ知つて居らぬ者が尠くないやうであります。なかには三部經と書くべきを三佛敎とか三部敎とか三佛經とかの假借字を書いたり、疑つたのになると讃佛經または產佛敎といふやうな振つたのがある。これについて面白い話を聞たことがある。ある僧侶がお逮夜にお參りしたところが、そこの主人が「けふは恰度何年かの年回に當つて居りますので三部經さんを一つあげてやつて下さい」と賴んだので僧侶は、「今日はお經の本をもつてきて居りませんから明日でも」といふと「三部經の本なら私の家にもあります」と云つて忝々しく持ち出してきた箱を開けて見るとそれは三帖の御和讃であつた。僧侶は「これは御和讃です、お經ではありません」といふと、その主人は心得顏に「これでも結構です、今日はこれをあげて置いて下さい」と云ふたといふことであります。いかにも御和讃は、淨土和讃高祖和讃、正像末和讃と都合よく三部に分れてありますので、それを三部經だと思つて居つたのでせう。また、あるものしり顏の同行が「三部經といふのはそれあの正信偈と御和讃と御文章とのことじや」と半可通振りを遺憾なく發揮したといふ話もあります。勿論、平常によくお說敎などを聽聞して居られる方方は、三部經を通じて顯示されてある肝要なる點、申さば阿彌陀如來のお慈悲といふことは、よく領解されておられませうが、さてその一々の經典の概要となると承知されて居る方は多くないやうであります。斯う云へば、なかには、

「知つて參る淨土でない、經典の內容なぞは知らなくつてもよいのである」と考へられる方もありませうが、それは世間でいふ負けおしみといふもので、どちらかと云へば、知りたいのであり知つて置いた方がよいのであります。この淨土三部經に對する知識を持つことは、やがて私共の信念を正しく培ふてゆくことになるのであります。斯ういふ意味合からして、今回私にこうした題の下に話せといふことになつたのであると思はれます。

次に、お話に入るまへにもう一つ申上げて置きたいことがあります。それは佛前讀經の意義に就てゞあります。これに關しては眞宗學者の間にいろ〳〵と考察されて居りますが、つまるところ眞宗敎義の上からは、佛前讀經を佛恩報謝の行業と云はねばならぬのであります。ところが實際を見ますとなか〳〵さうはなつて居りませぬ。先程も申上げたやうに、年忌佛事には僧侶を招き佛前でお經を讀んで貰ふといふことが一つの慣例であり、またさうしないと氣がすまぬといつたふうに考へられてゐる場合が多いやうであります。その證據に、僧侶は佛前で大聲を張上げて、出來るだけ早くまた要領よく順々に讀誦してゆく。とその間、家人や參詣客は雜談やら接待やらでごて〳〵してゐる。ひどいのになると別室で茶を飲んだり、臺所で御馳走ごしらへに沒頭して少しも聽聞しやうとは爲ない。讀む方もお經がすめばやれ〳〵濟んだ、讀ませる方もやれやれ濟みましたか御苦勞さまと云つた風でさあどうぞ御膳をとなると、主客ともに坐席を整へて急に緊張した態度を示し、可笑しい程に熱度が加はつてくる。これには種々な理由があるでせう。たとへば棒讀みに讀み流されてゆく經文に對する理論を缺くこと――これは最大の原因であらう。その外に時間の長くかかること、時代の樣式と無關心であること。――といろ〳〵あるでせうが。根

本的な問題は「佛さまにお經をあげる」といふ考への誤解から訂正してゆかねばならぬと思ひます。元來、佛敎經典の樣式からみてもわかることでありまして、どのお經でも多く題號は佛說何々經とありますやうに、これは佛さまが吾吾のためにお說きなされたのであります。つまり、佛陀が一切群生のために說き示されたお言葉を、後に編纂されて一部の經卷となつたものが今日の經典であります。この意味から申せば、如來さまより私達へ下された「お手紙」であると思へればよい譯であります。そこで經典を讀誦するときのこゝろもちは、一言一句もおろそかにせず、それをそのまゝ私の心へ彫りつけてゆくと云つたふうな精神でなければなりません。だから僧侶を招いてお經をあげて貰ふときは、まさしく如來さま直々の御說法を、僧侶の口を通して拜聽させて頂くのであると考へねばならぬ筈である。また讀誦する僧侶にしても、自から如來の金口說法を味讀すると同時に、おのずから餘人にもその德がゆきわたることゝ信じ、その行業がやがて佛恩報謝のいとなみであるとの信念に始終すべきものであります。けれども事實としては、斯うした境地にある者は、いたつて稀れなやうに見受けられます。これに就ても稽滑な話があります。ある人が年回に僧侶を招請した。僧侶は三部經を讀誦するつもりでやつてきたのでしたが、何かの都合で「本日は三部經全部でなくその內の一卷だけあげて頂だけばよろしゅゝます」と申したところ、その僧侶は大變に氣色を損じて「親の年回ぢやないか儉約するな」ときめつけた……一卷だけでよいとなるとお布施が減少するといふのである。これは營業化した僧侶を巧みに諷刺したものでありませうが一般佛敎徒にとつては、その誤まれる宗敎生活の一端を暴露したものとして、お互に深く反省しなければならぬことゝ存じます。僧侶の讀經を時間の長短其

他の條件で評價するやうなことは、自他ともにふかく愼しまねばならぬことであります。本來法施と信施とには直接に因果關係を顧慮すべきものではないのであります。讀む方も無反省で讀み、讀ませる方も因襲的に讀ませてゐるために、斯うしたあさましい滑稽がもち上つてくるのである。お經は澤山に讀誦するほど功德が多い、長いほどよけいに有り難いといふやうな功利的な思想は佛敎のどこにもない、またそんなことをお釋迦さまは一遍も仰せられたこともない。特に眞宗の流れを汲まるゝ方々は、一念の信心、一遍の念佛、それが萬卷の經典聖敎と等差なく同價値であるとの敎の意味を體得して、誤つた考へから解放されねばならぬと存じます。この點から申しましても、御門徒の方々に三部經の內容に關する知識を充分しつて頂く方が好都合であります。

まだいろ〳〵と申上げて置きたいことが澤山ありますが、何分とも一日一講一時間餘り、それで僅々三日間といふのでありますから、迚ても完全の期せられないことは明瞭であります。そこで大體、三部經の大要とその組織といつたやうなことを、專門的な研究にわたる點は拔きにして、できるだけ急スピードで平易に御話申上げてみませう。うまく纏りがつけば幸福であります。

第一講

さて、一概に三部經と申しましても、これには種々ありまして、例へば天臺宗では『無量義經』、『法華經』、『普賢觀經』を法華の三部と云ひ、また『法華經』、『仁王經』、『金光明經』を鎭護國家の三部と申します。眞言宗では大日の三部と稱して『大日經』、『金剛頂經』、『蘇悉地經』の三經が撰定されてゐます。その外では彌勒の三部『上生經』、『下生經』、『成佛經』があります。斯のやうに三部經と稱せられてゐるものが四五種ありますが、こゝでお話申上げやうと

するのは、淨土教で依用されて居ます三部經のことで、すなはち『無量壽經』『觀無量壽經』、『阿彌陀經』の三經であります。これを他に簡びまして『淨土三部經』といふのであります。

先づ最初にこの『淨土三部經』に對する概念を得るために、三部のお經を通觀して何が說かれてあるか――どういふことが記されてあるか、またどんなお經であるかといふことを申上げてみませう。

この三つのお經を通じて說かれてあることは『阿彌陀如來正覺の因果』、『極樂淨土の依報正報』、『衆生往生の因果』などでありまして、ひと口に云へば、南無阿彌陀佛なる佛さまに關する總てのことが記されてあるのであります。それがいろ〳〵の方面から、さま〴〵の樣式で說かれてある。從つて三部經の一々の立場が異つてくるのであります。それは後にお話するとして。立場に相違があつても、いづれも阿彌陀如來のお慈悲を示されたものであることに於ては等いのであります。そも〳〵この阿彌陀如來と申す佛さまのお慈悲の深いことは特別なもので、釋尊一代の御說法のいたる處に示されてあります。まづ一切經をしらべてみますと『華嚴經』の入法界品『妙法蓮華經』の化城喩品や藥王菩薩本地品『大般涅槃經』、『大般若波羅密多經』等を初めとし二百數十部のお經に所々散說されてあります。人氣のよい佛さまといふては語弊がありませうが、この點はほかの佛さまにはとてもみられないところであります。それ故に支那天臺宗の第五祖と崇められる荆溪の湛然といふ方は、法華三大部の註釋書の一つである『止觀輔行傳弘決』といふ著書の中で「諸經所レ讃多在二彌陀一」と阿彌陀如來を嘆じて居られるほどであります。かやうに普遍的に讃說せられてある阿彌陀如來の御德だけを――ほかに何者をも混じへずに、懇ごろに說き示

されたものが、すなはちこの淨土三部經であります。

この淨土三部經はどんなお經であるか。言ひ換れば如何な地位にあるお經でまた從來の人々によつてどういふ風に取扱はれてきたかといふことを申上げますと。先に述べたやうに淨土三部經は、彌陀如來の正覺の因果と極樂淨土の依正二報および衆生往生の因果とが說かれてあるのでありますから、とりもなほさずそれは純粹宗敎を表示した經典であります。古來八千餘卷と稱せられる一切經（大藏經ともいふは）佛敎の集成でありますが、これらの經典の內容を窺ふと、それは頗る多趣多樣であつて、そのうちには宗敎はもとよりのこと、哲學、政治、經濟、醫學、文學、工藝、美術、音樂、天文等、その他あらゆる學科が潤澤に包含されてあります。ところがそれらの中で、釋尊出世の本懷ともいふべき肝心かなめの純粹宗敎のみが說かれてあるものと云へば、殆んど皆無と云ふてもよい位の有樣で、實に吾が淨土三部經ほど端的に純粹宗敎のみを顯示されてある經典は他にないといふても敢て憚るところはないと存じます。さればこそ、わが親鸞聖人は「それ眞實の敎を顯さば、すなはち大無量壽經これなり」と崇敬せられ。日溪法霖師は「今宗の學者大藏中の三部を學ぶこと勿れ須らく三部中の大藏を學べ」と道破せられたのでせう。斯うした點からして、私は佛敎が宗敎として價値ある限り、わが淨土三部經が一切經典の最上位に置かるべきものであると信ずる者であります。

かく淨土三部經が純粹宗敎を表示した經典であるが故に、眞劍に道を求めてこの經典を玩味せられた先聖方が如何に數多かつたかは、寔に驚くの外がない次第であります。印度、支那、本邦の三國にわたつて傳持せられた、龍樹菩薩、天親菩薩、曇鸞大師、道綽禪師、善導大師、源信僧都、法然上人の謂ゆる七高

祖は申すまでもなく『起信論』の著者なる馬鳴菩薩、盧山の慧遠ならびに白蓮社同人、飜譯家の菩提流支等は淨土願生の行者としてよく知られ。また、涅槃宗の淨影、天臺宗の智者――義寂――四明、三論宗の嘉祥、法相宗の慈恩――憬興、華嚴宗の元曉等いふ人達は、自己の宗義を研鑽する傍はら、その宗敎的行業として、念佛三昧を修し且つ淨土三部經に註釋を書いて居られる。そのほか懷感――法照――少康など有名な人が尠くない。これは、道を求めることに目覺めた者が、單に哲學的瞑想にふけるだけでは滿足することができないで、おのづと純粹宗敎の世界に流れ込まれたのでありませう。

これで淨土三部經といふお經は、どんな經典であるかといふ大略が、お解りになつたと思ひますから、次にこの三部經の說かれた場處とその時機とをお話し申上げることに致します。なほこれから後は三部經の一つ〳〵に就て述べますから、便宜のため『無量壽經』を大經『觀無量壽經』と觀經『阿彌陀經』を小經といふ略稱に隨ふて申上げることに致しますから、そのおつもりで聞いて頂きます。

三經の說かれた場處は、一々お經の始めに出ておりますから判然してゐますが、その時に就てはどれも、皆一樣に「一時佛在」と記されてゐるために、何時頃であつたか、また何れが先にどう云ふ順序で說かれたかといふことが明瞭でない。ところが幸ひなことに『觀經』だけは、その歷史的背景がこのお經の出現する近因となつてゐるために、その史實がはつきりと記されてある。そういふ譯でまづ『觀經』の說時を確定して、それから他の二經を推定するのが、適切な方法でありませう。

『觀經』といふお經は、阿闍世太子の逆惡が緣となつて說かれたもので、この

阿闍世太子といふ方は、中印度摩揭陀國の國王頻婆娑羅と王妃韋提希夫人との中に生れた王子でありますが、いろ〳〵な理由から父王を弑して一日も早く王位に即かふといふので。父王を牢獄に押込め食物を絶つてしまつた、それを救はふとされた母親をも、別の牢屋へ拘禁してしまつた、これは「王舍城の悲劇」として有名な史實であります。その時、韋提希夫人は日頃信賴する釋尊に「穢れた牢獄へ世尊にお越しを願ふといふことは出來ないから、お弟子の阿難さまでも目連さまでよいから一度こゝへ來て頂いて、有り難いお話を聞かせて下さい」とお願ひ申上げた。ところが恰度釋尊は靈鷲山（耆闍崛山）の講堂で、法華一乘の妙法を說いて居られる眞最中でありましたが、この獄中にある韋提希夫人の切なる願ひを聞かれると、捨てゝ置く譯にはゆかぬといふので、大切な法華の會座を中止されて、一足飛びに王舍城内の牢舍と訪ね、あはれな韋提希のために懇ごろに說法されたのが『觀經』の正宗分であります。そうして釋尊が靈鷲山へお歸りになると、待構へてゐた大勢の弟子達が、どういふ御要件でありましたかとお尋申上げたので、釋尊はこれら法華の會座の聽衆にも、今說いてきたみのりを聞かせてやりたいとのお思召から、隨行して行つた阿難に命じて復演せしめられたものがこの『觀經』であります。それで『觀經』のことを「一經二會」と云ひます。すなはち王舍城中と靈鷲山上とで同一の說法が二度あり、しかもお經は一つであるとの意であります。

これから考察して『觀經』の說時は、阿闍世太子即位の直前であることがよく分る。そうして、釋尊の入滅は『善見律毘婆沙』には阿闍世が王位に登つてから八年の後であるとあり『大涅槃經』には、即位後三ヶ月を得て入滅し玉ふとありますので、多少の異論はありますが、大體に於て釋尊晩年の說法である

ことは動かない譯であります。

以上で『觀經』の說時は、釋尊の晩年で七十三歲ごろから八十歲までの間であつたといふことは判明しましたが『大經』には歷史的背景がないので、お經文の上では判然しないのであります。處說は耆闍崛山と記されてあるから、同じく靈鷲山であつたことが伺はれますが、說時はどうもそう云ふやうな譯には參りませぬ。ところが流石岡眼なお方だけあつて、法然上人は『觀經釋』に三文一理を擧げて『大經』は『觀經』よりも以前に說かれたものであると判定して居られます。その三文といふのは、(イ)『觀經』の華嚴觀に『法藏比丘願力所成』といふ文がある。この願力といふのは大經所說の四十八願の因果を指示したものと云はねばならぬから『大經』は『觀經』より以前に說かれたものである。(ロ)『觀經』の中品下生の文に「亦說法藏比丘四十八願」とあるが、もし『大經』より前に『觀經』が說かれたとすれば、少くとも四十八願の內容を『觀經』に明さねばならぬ。それがなくて旦に「法藏比丘四十八願」とあるところよりみれば『大經』がそれ以前に說かれてあつたといふことは明かなことである。(ハ)『大經』上卷に「法藏比丘爲已成佛而取滅度爲末成佛爲現在」とある。阿難の問に對して「法藏菩薩今已成佛現在西方去此十萬億刹其佛世界名曰安樂」と釋尊が答へられてゐる。もし『大經』が『觀經』より後であるならば斯うした問答はない筈である。それは旣に『觀經』には極樂世界や阿彌陀佛のことは詳しく說かれてある。すなはち『觀經』の復演までした阿難であるから彌陀成佛のことはその時に知つて居る譯である。それに今成佛の如何をお尋ねしてゐる點からみて、この『大經』はかの『觀經』よりも前であることが知られるといふのである。かく三箇の經文によつて、大前觀後の旨を顯はされ。續

いて『大經』には法藏菩薩の發願修行のありさまや。淨土建立の越きが具さに說かれてある。その說示を根據として『觀經』の說かれたことは、理論上きわめて至當のことゝ考へねばならぬ。といふ一理を述べて『大經』は『觀經』より以前の說法であると斷ぜられたのであります。これでまづ『大經』の說時は決つたと致しておきまして、次にうつります。

最後に『阿彌陀經』でありますが、これは皆樣も御承知の通り、至極簡潔なものでしかも內容の完備したお經であります。紙數がわづかに四枚しかないので古來これを『四紙經』とも云ひ、また梵語の原本では『無量壽經』と同じ題目になつてあるため、その分量から區別して、かれを『大經』といふに對しこれを『小經』とも呼ぶことになつてゐます。このお經も『大經』と同樣、說處が分つて說時がはつきりしない。場所は舍衞國の祇樹給孤獨園とありまして、謂ゆる祇園精舍でなされた御說法であることが知られます。さて說時に就ては先哲がいろ〳〵考證の結果『觀經』より後のものであるとの事實を握られたのであります。それはこの『小經』の對告衆を調べてゆくと、舍利弗、摩訶迦葉、阿難陀等の聖者達と肩をならべて迦留陀夷といふお弟子の名が出てあります。この迦留陀夷は六群の比丘と稱せられた不良比丘の一人で、面白い挿話を澤山もつて居る方であります。由來、六群の比丘と呼ばれた六人組の不良比丘は、これも不良な尼さんの集りである六群の比丘尼と相呼應して、つねに敎團の風儀を亂した人達で、しかもどれもこれも舊くからの弟子達でありました。そのうちでも迦留陀夷はエロチックな惡戲を多くやつたので特に有名であります。ことに面白いのはその名前の出處で、迦留陀夷とは譯して黑光または黑曜と申します。それはこの人の皮膚の色が黑びかりするほど黑かつたから、そうした

名がつけられたのであるといふことです。印度人が黑いと驚くほどであるからそれはよつぽど黑かつたことでせう。さてこの迦留陀夷は釋尊が修道上の大障碍として誡められる性の問題に、始終ふれて居つたゝめに、なか〳〵悟道に入ることができなかつた。それで久しい間未離慾未得道の平比丘として、取扱はれてゐたのでありましたが、釋尊の限りなき慈愛からなされた、不斷の敎養が功を顯はして、とうどう法華說法の會座で、阿羅漢といふ聖者の悟りを體得することが出來たのである。だから『法華經』以前に說かれた經典には、その名が出て居らないのであります。それがいまこの『小經』の祇園精舍の會座では聖弟子として堂々と多列してゐられる。この事實からして『小經』は『法華經』より後の所說であり『觀經』は法華同時の經であるから、從つて『小經』は『觀經』以後に說かれたものであることが推定せらるゝ譯であります。また法理から云ふても、一代結經と尊崇せらるゝ『小經』であるから、どうしても『觀經』より後に說かれたものであると斷言せられねばならぬのであまます。

以上は、外側から見た三部經觀とでも云はるべきもので、粗雜ではありましたが、大體三部經の風格とでもいふやうなところを、御紹介申上げたつもりでありますが。いま一つ申殘して居る譯本に關することも。簡單に申添へまして本日の講話を終り。明日からは內側から、一つ一つ味ふてみたいと思ひます。

印度で編纂された淨土の三部經が、支那に傳へられて、どんな具合に譯出されたかと申しますと、概略、次のやうなことであります。

まづ『大經』は古くから五存七缺と云はれて、すべてゞ十二回飜譯されたと考へられて居ります——この十二譯說に就ては一二異論もないではありませんが此處では態と通說に隨つて置きます。十二譯のうち七譯は種々な理由があつ

て、いまは散逸して傳はつて居らないので、現に藏經に收められてゐるのは左の五種ありでます。

佛說無量淸淨平等覺經　（二卷）　後漢　支婁迦讖譯

佛說阿彌陀三耶薩樓佛檀過度人道經　（二卷）　吳　支謙譯

佛說無量壽經　（二卷）　曹魏　康僧鎧譯

無量壽如來會　（二卷）　唐　菩提流志譯

佛說大乘無量壽莊嚴經　（二卷）　宋　法賢譯

この外、に後漢の安世高、曹魏の白延、西晉の竺法護、東晉の竺法力、同じく東晉の覺賢、宋の寶雲、曇摩密多の譯出したものがあつたとのことでありますが、これらは現存してゐない、この七種の缺本とまへの現存する五種の譯本とを合せて、一口に五存七缺といふたのであります。

次に『觀經』は、三たび譯出されたと云はれてゐますが、現在では左の たゞ一つだけが傳はつてゐます。

佛說觀無量壽經　（一卷）　宋　畺良耶舍譯

この他に同名のものが後漢時代に譯者不明の一卷と、宋代の曇摩密多譯の、『佛說觀無量壽佛經』一卷とがあつたと云はれてゐますが、これは共にいまは傳つて居りませぬ。

次に『小經』は、これも三度飜譯せられたが、今ではそのうち左の二譯だけが傳はつて居ます。

佛說阿彌陀經　（一卷）　姚秦　鳩摩羅什譯

稱讚淨土攝受經　（一卷）　唐　玄奘譯

缺本になつてゐるのは、宋代の求那跋陀羅によつて譯された『佛說小無量壽經』であります。斯くの如く、淨土敎の經典は支那の譯經時代を通じて、いく度もいく度も、多くの三藏達の手によつて譯出せられました。これによつてみても、淨土門の敎が、如何に多數の人々に渴仰せられ信奉されてきたかゞわかるのであります。

さて以上の如く、何回となく譯出されましたが、現存するものは『大經』に五種、『觀經』は一種、『小經』に二種あるわけであります。このうちで、吾が眞宗を初め淨土門の諸宗派に於て、正依の經典として撰定せられてゐるものを擧ぐれは左の通りであります。

曹魏の嘉平四年に唐僧鎧の譯した　『佛說無量壽經』　二卷

劉宋の元嘉十年に畺良耶舍の譯した　『佛說觀無量壽經』　一卷

姚秦の鳩摩羅什の譯した　『佛說阿彌陀經』　一卷

時間が經過いたして居りますから、今日はこの邊で止めて置きます。

第二講

これから三部經の一々について、その内容を考察し、如來興世の御本意を味はゝして頂かうと存じます。

昨日も申し上げましたやうに、淨土三部經に說かれてあるありだけは云へば「彌陀正覺の因果」「淨土の依正二報」「衆生往生の因果」のほかはないのであります。まことにこの三部經といふお經は「純粹宗敎の結晶」でありまして、そこには理屈や理論といふやうな、觀念遊戯に類する世界はひとつも示されてゐないのであります。もし淨土門の敎義に理屈や理論が語られるとしたならば、それは後代の學者が自己の才學を衒ふために、さかしらにも道理らしく附會したものである。さればこそわが親鸞聖人の世界には、理屈や論理を弄ぶ法門沙汰といふものが毫しもないのであります。これは御著述の『敎行信證』や御消息を拜讀すれば、直ぐになる程と肯かれるところであります。

一體、人間には誰れでも性格といふのか素質といふのか、通有性としていろ〳〵奇妙な癖があります。そのひとつに「譯の分つたことを譯の分らぬものにする」といふやうなのがある。それはそのまゝ素直に受取ればよく分ることをいろ〳〵と理屈を附會たり、あれこれと揑ねまはしたりして、とう〳〵終局には譯のわからぬ難解なものにこしらへあげる。そして本人自身は「俺れは偉い」と自惚るのはまだしも、側の人々までが「さすがは學者だ偉いことをいふ」と感心してしまふ。こういふ風なことを學問だと考へてゐる人が、隨分澤山あるが、まことに怪訝なことであります。そこでこの淨土三部經は純粹宗敎だけが說いてあるお經でありますから、哲學的考察の對象でもなければ、理屈や理論の資料ではない。そんな考へをもつてこのお經をいたゞいては何の詮もないこ

とである。このお經はまさしく信ずべき經典なのであります。

ところが、この卒直に信ずべきお經に、いまでは、さま〳〵な理屈が附け加へられ、素人には一寸やそつとで合點のゆかぬやうな、難解な釋義がほどこされるやうになつてきたのであります。これは、いま申した人間の通有性が然らしめたもので、困つたことではありますが、どうもいたし方のないことでせう。今回はさうした點をなるべく避けて、お話いたすつもりで居りますが、どうかすると踏み込みさうな氣がします、その節は惡からず御寛容を願ふて置きます。

偖て、經典を繙くにはその解釋の基準として、一般に序正流通の三分科法が適用されてゐます。これは一部の經典を、序分と正宗分と流通分の三つに分けて、順序を正しく誤りなきやう解釋してゆかふといふので。支那東晋時代の代表的高僧として知られた、かの彌天の道安といふ人によつて創められた方法でありまして、後代の學界を稗益するところ極めて大なるものがあり、まことに適切な分科法でありますから、いまもこれに從ふことゝいたします。

『大經』の序分は、二つ重なつてゐるのでありまして、初めを證信序と云ひ次を發起序と云ひます。「我聞如是一時佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱云々」とあるのが證信序で、これは六事成就といふて孰れのお經でも、殆んどすべて最初のところには斯ういふ風に記されてある、それでこれをまた通序ともいふのであります。

六事成就といふのは、佛陀の說法が成立する爲に要する總ての條件が揃ふたといふことで、これに信、聞、時、主、處、衆の六事がある、それで六事成就といふのであります。すなはち我聞は聞成就で如是はかくの如きはこれ佛の所說なりと信奉して疑はざる義を表はすので信成就、一時は佛の說法その時機を

失はぬことを示す意で時成就、佛は敎主なるが故に主成就、住王舍城等これはその場合々々で一々違ふが說法したまへる場處を明すので處成就、與大比丘衆……等これもそれ〴〵出入はあるが對告衆を擧げたもので對告衆のない說法は無意味であるからこれを衆成就といふので、これで御說法に必要な條件が全部揃ふた譯であります。

殆んどすべての經典の初めに、かく六事成就が記されてあるのは、單に編纂者の自由な意志からであるかといへば、そうではないのであつて、實は佛陀の仰せつけであるのであります。そのことは『大般涅槃經後分』の第一卷に詳しく載せられてある、その大要は、阿難が佛陀の滅後そのみ敎へを結集するときに、各々の經典の最初のところへは、如何なる言葉を置けばよろしう御座ゐますかとお尋ね申上げたときに、釋尊はこれに對へて「一切經の初には、當に是の如く我れ聞く一時佛某方某處に住して、諸〴〵の四衆のためにこの經を說くと安くべし」と仰せられたとあります。斯ういふ理由で、どのお經にも初めのところには六事の成就が述べられてあるのであります。

いまこの『大經』の證信序では、六事成就の第六衆成就のところが、特別に叮嚀に示されてあります。初めには謂ゆる聲聞衆と呼ばれる小乘阿羅漢の悟りを開らかれた、聖弟子達の主なる名を連ねてある。次で大乘の菩薩さまが出されてあるが、これには二類四種といふて、あらゆる樣式の菩薩が網羅されてあります。すなはち出家在家の二類と、淨土成佛の菩薩、穢土成佛の菩薩、此の世界の菩薩、他の世界の菩薩といふ四種の菩薩の代表的な方々のお名前を擧げそのうへ是等の菩薩さまは、いづれもみな八相成道して正覺を成就し、自利々他の功德を圓滿に具備して居られる方達であることを細まゝと記るされてあ

ります。その八相成道の叙述には、從兜率天下託胎、出誕、處王宮、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃と釋尊一代の歴史的過程を八區劃に分別した、謂はゆる釋迦八相示現に適應するやうな風に說かれてある。元來、菩薩の成道にはいづれも獨特な願行があつて、それ〴〵違つた型式で成道せらるゝものとされて居りますが、いまは釋尊成道の模樣に隨がへて述べられてあります。これはやがてこの『大經』が釋尊出世の本懷であつて、聽衆として來會せられてゐる菩薩方も敎主たる釋尊の御本意と一致して、共々に廣く彌陀の本願を宣揚せらるゝ趣きを開示せられたものであります。

また八相成道の有り樣を、詳細に述べられてあることは、そこに深い理由のあることゝ窺はれます。これには二た通りの見方があるようであります。一つには、衆生濟度といふ事業が並大抵の仕事でない、生命を投げ出してかゝらねば出來ることではないといふ意を顯はすのと。いま一つには、自力修道の如何に困難なものであるか、また修道の內容が如何に深廣なものであるか、それは單なる念願と努力とでは成就せられる世界でない、そこには堅忍不拔の大精神と粉骨碎身の實修行とを要する旨を、示されたものであると味はゝれるのであります。因みに、證信序と云はれる意味は、六事の成就を叙することによつてその經典の正確なるを證據立て、且つ將來この經典によつて敎化を受くる衆生に信を發起せしめる序分であるといふので、證信序と名づけられたのであります。

證信序が終りますと、續いて發起序が說かれてあります。發起序とは、いまこのお經が說き起される因緣を示された序分といふことで、つまり說法發生の動機といふのであります。この發生の動機といふものは、經典によつて、それ

〳〵異なるものであるから、また別序とも云はるゝのであります。

この發起序は、他の一般のお經の發起序とは餘程その趣きが相違してゐまして、謂はゆる五德瑞現といふことが一經の說法の動機となつてゐるのであります。證信序のところで申上げたやうに、靈鷲山に於ける『大經』說法に要する六事の條件が完全に具備いたしますと、やがて釋尊は、いつものやうに靜かに主題とされる說法にとりかゝられます。ところで、今日は說法の形式はいつもと同樣ではあるが、敎主たる釋尊の御相好が、ころつと異つてゐる。そこのところを經文には「爾時世尊、諸根悅豫、姿色淸淨にして、光顏巍々として在します」と說かれてある。そこで阿難は默つてゐることができず立ち上がつて、「世尊、今日はどう遊ばされたことでありますか、いつもとは御容姿が異ふて何んといふ尊さでありませう。今日の世尊は奇特の法に住して居られる、今日の世雄は佛の眞實三昧に住して居られる、今日の世眼は人天の大導師たるの德行を遺憾なく發揮して居られる、今日の世英は最高の智慧を顯示して居られる、今日の天尊は自利々他圓滿した如來その儘の德を表象した慈悲の結晶として拜まれます。今日こそは御こゝろの奧底に秘められた、眞實のみ法をお示し下さるのでは御座ゐますまいか、……なんといふ尊い瑞相でせう!?」と御尋ね申上げてゐる。常隨眤近の阿難が、かくまで驚嘆したほどの變化が、どうして釋尊のうへに顯現せられたかといふと、そこにはさうならねばならぬ所以があるのであります。今日の釋尊はいつものやうに、單なる釋尊ではない、今日こそは出世の本懷たる眞實の敎――彌陀の本願を說かふとされてゐる、そこでおのづから本佛たる彌陀の德とひとつになつてしまはれたからである、これを融本の釋迦若くは融本の應身と申すのであります。すなはち釋尊のおこゝろもちが、

常とは異つてゐることを表示せられたものであります。

心のもちかたひとつで樣子の變ることは、世間でよくみることで、謂はゆる思ひ内にあれば色外に現はるゝわけであります。姿の美醜にかゝはらず、心のやさしい人にはおのづから敬愛の念が湧き、慳貪な心のもちぬしにはひとりでに嫌忌の情が起きてまゐります。また同一人のうへにでも、いまのいまゝで深かい親みを感じてゐたのが、急に氣むづかしく思はれてくる場合がある、その時こちらに何等異狀がないならばそれは、必度その人の心中に何か大きな變動が起つたからであります。ある書物でこんな話を讀んだことを覺えて居ます、たしか伊太利であつたと思ひますが、ある街にたいさう幸福に暮してゐた一人の少年があつた。いかにも幸福らしく無邪氣な顏付をしてゐたので、ある畫家が、その少年をモデルにして天使の繪をかいて展覽會へ出品したところ、大變に評判がよく、その畫家は一躍して大家の班に列したのでありました。その後幾年かを經てかの畫家は、先に評判のよかつたエンゼルの繪に對照せしめやうとの考へから、こん度は惡魔の繪をかいてもう一度世間をアッと云はせやうと計劃したのでありました。それでその構圖に苦心した結果、漸やくのことで下圖だけは出來上がつたのでありますが、肝心の惡魔のモデルが見當らないので閉口して居つたのであります。ところへひとりの友人が訪れてきて、その話を聞き「それは何んでもないことじやないか、この世の中で惡人の集合所と云へば監獄である。そこには怖るべき犯罪者が澤山にゐる、なかには殘忍な殺人鬼と云はれるやうな人間もゐる、そこへ行つて搜せば一人や二人のモデルを得られぬことはなからう」と敎へてくれましたので、彼れは「なる程、そこへ氣がつかなかつた」と、喜び勇んですぐに家を出かけたのでありました。

監獄へ着くと役人の許可を得て、重罪犯人の監房をあれこれと熱心に視察してみたのでありますが、どうも「是れは」と云ふやふな人間が見當らない。それはそうでせう、如何に惡人だといふたところが、どこかに良心の一片ぐらいは持つてゐる、頑是ない幼兒が川へでも落ち込めば助けてやる位の慈悲心はもつてゐる、骨の髓まで惡化して、そのまゝ惡魔のモデルになれるやうな人間はそんなにざらにあるものではない。彼れは期待を裏切られ憔然として、其處を辭して歸らうとした時、役人の一人が「あゝ、もう一人あります大變に性根が拗くれてゐてみんなを困らせてゐる奴です、一年近くも獨房にほり込んでありますが手がつけられません、見せてもよろしいが近寄らぬやう注意して下さい」と云ふて、その罪人の所へ案内してくれました。彼は暫らくその男の顏を凝視してゐたが、覺えず「おゝこれだ！」と叫ぶと、用意の道具をとり出して手早くスケッチにかゝり乍ら、その罪人に對し「君、御迷惑でせうが、暫時動かないやうにしてゐて下さい」お願いたしますと叮嚀に會釋して、筆を運ばせかけました。すると今まで默然として陰險な眼付きで、胡散臭さうに睨付けてゐた男が、急に懷かしさうな顏付で「畫工さん、お久しう御座います、また私を寫生なさるのですか、今度は何んのモデルにです、エンゼルには齡がゆきすぎましたが神樣にでも？」と云ふたので、畫家は駭いたが、なほ詳しく語り合ふてみると、その男こそ曾つては天國の花さたゝへらるゝ天使のモデルとして彼れの畫架の前に立つた、かの無垢な少年であつたのでありました。其後、間もなくこの少年の兩親は不慮の災難に遭遇して急死を遂げた、樂園のやうな幸福に充たされてゐた少年の家庭は、一朝にして曠野のやうな寂寥な世界と化し去つてしまふた。斯うした境遇の激變が因となつて、少年の環境はずん〳〵加

早度を以て惡い方へ惡い方へと進展した結果、ついに今日のあり樣となつたのであるといふのでありました。

この話は、境遇と精神、精神と肉體の連鎖的關係を巧みに物語つてゐます。いかに境遇が然らしめたとは云へ、一度は天使のモデルとして賞でられた少年が、數年後には恐ろしい惡魔の標本として、しかも同一畫家によつて選ばれたといふことは何んと云ふても、境遇が精神に、精神が肉體に迫ぼす力の偉大さを、表示してゐるのであります。お話が妙な調子になつてきましたが、つまり心の置きどころひとつで、形態は如何やうにでも變はるといふことを申上げたのであります。

阿難が、釋尊のうへに顯現せられた奇特の瑞相を看取して、こゝろに今日こそ眞實無上の大法を聽受することができると悅びつゝ、瑞相示現の所以をお尋ね申上げたところ、釋尊は、「阿難よ、それは誰れか人間以上のものがお前に敎へて問はせたのであるか、またはお前自身がこゝろから尋ねるのか」と反問せられ、阿難が「誰れからも敎へられませぬ、私自身がこゝろからお問申上げたのです」と答へてゐます。一寸見ると、この問答は大して必要があるやうに思はれませぬが、なか〳〵どうして、必要がないどころではない、聞法の用意としては、この上もない肝要なところであります。それは信の世界の成立する、唯一の要素であります。如何に眞實の大法を說いても、相手に受け容れやうとするまことがなかつたならば、なんの益にもたゝぬことになる。曇鸞大師は、この味ひを「虛往實歸」といふ言葉で顯して居られます、即ち、法を聞持するには、心を虛しうする——からつぽにしてかゝらねばならぬと言のであります。例へばこの洋盃に水を盛うとすれば、洋盃の中が空虛であらねばならぬ、

中に雜多なものがごた〳〵と入つてゐては、水が完全に容つてくれない。それと同樣に、法を聞くには、自己の心を空虛にして、つまらぬ計らひなどはとり除け、素直に聞けば、おのづと法が入り滿ちて下さる。そこの味ひを「虛しうして往き實にして歸る」と云はれたのであります。言ひ換ふれば、說くものと聽くものとの心が一致して、はぢめて法が活かされるといふ義を示され一段で寔に大切なところであります。

說聽一致の義が示し終ると、釋尊は「善い哉な阿難、問へる所甚だ快し、深き智慧と眞妙の辨才を發し、衆生を愍念して斯の慧義を問へり」と阿難を褒めて居られる。阿難が瑞相を看取したとき、既に眞實の世界に一歩入り込んでゐたのであります。五德瑞現といふのは、釋尊が本師彌陀と一つになりきられた相好で、それは眞實そのまゝの姿であります。眞實を瞻ることのできるものは、眞實の眼が開らけて居らねばならぬ、阿難はそれを眼のあたりみることができたのである。これはすでに眞實に惠まれてゐる證據であります。そこでいま釋尊は、阿難を褒められる言葉のうちに「愍念衆生」といふことを云はれたのである。愍念衆生とは、一切の群生を愍れむこゝろであります。群生を愍むといふことは、すべてを救ふこゝろである、すべてを救ふこゝろは、如來のこゝろである。それは、とりもなほさず他力本願の極致であります。阿難は未だ南無阿彌陀佛の南の字さへも聞いては居らぬ、たゞ本師彌陀とひとつになつて居られる釋尊――融本の應身を拜んだ丈で、すでにかゝる言葉を附與されたのである、まことに不思議の佛智と仰ぐべきであります。

かくて釋尊は、眞實の敎に値遇するといふことは、かの芽ばへて一千年、苦みて一千年、開いて一千年、合せて三千年に一度だけ開花すると云はれる優曇

鉢羅華の花盛りに、出會ふやうなものであると、喩へを以つてその稀有なることを述べ。これから說かんとする彌陀法の尊高にして、出世の本懷たる所以を示して。「阿難よ、諦らかに聽け、いま汝の爲めに說かん」と、本題に入る旨を告げられると、阿難は、謹んで拜聽いたします……「唯然、願樂欲聞」と、お對へ申して居ります。以上で發起序を終るのであります。

これから先きが、まさしく正宗分と申してこの『大經』一部の最も主要なる部分、すなはち、彌陀正覺の因果、淨土の依正二報、衆生、往生の因果などが說かれるのであります。最初に阿彌陀如來の本生が說かれてある、それによると過去久遠無量劫の昔、錠光如來が萬人を化導して入滅せられて以來、次に光遠如來、次に月光如來、次に栴檀香如來、次に善山王如來と順次に、總じて五十三の佛がお出ましになつたが、その次に出世されたのが、世自在王と申す佛であります。この佛の時に一人の國王が居られた、熱心に佛の說法を聽問してゐられたが、終に感激のあまり、王位も領土もみなうち棄てゝ、佛弟子となられた、これを法藏菩薩と申し上げるのであります。

法藏菩薩が、仔細に地上を觀察せられてみると、そこには無量の有情がある、彼れらは貪欲と愚痴と瞋恚の三毒に溺惑して、夜となく日となく惡業を積み重ねることにのみ奔命してゐる。勿論、聖道には全然無關心で、一善をも修めねば一行をも勵んで居らぬ、たゞこれ墮獄の業を深めるのに吸々としてゐる。自業自得とは云ひながら、彼等の足もとには、地獄への坑穴がその陷落を待ち受けてゐるといふ有樣で、げに噴火口上の舞蹈といふ體裁であります。かゝる現實相に直面せられた菩薩は、片時もじつとして居ることができないので、世自在王佛の所に詣り、衆生救濟のために獻身的努力を捧げ度いとの、廣大な願心

を具さに叙べ、その方法の御教授を切に悃願せられたのであります。時に師佛は、菩薩の殊勝な願心と、それを成就せねば止まぬといふ不屈不撓の精神とを洞察して、徐ろに「もし、大海の底ふかく沈められた寶を得やうとする人があつて、大海の水を汲み出さうと思ひ立つたとする、その人に倦まず撓まぬ大精神さへあれば、限り無き長時間を經て努力を續けるうちに、何時かは遂に海水を全部汲み干して、その底に沈める妙寶を、拾ひ上げることが出來るであらうやうに、道を求めるにしても、一向專念に精進するならば、如何に困難な願望であつても成就せられぬといふことは無い筈である。しつかりやるがよろしい」と鞭韃すると同時に、二百一十億の諸佛の國土を現示せられたのであります。

法藏菩薩は、師佛より懇切なる奬勵のみ言葉を受けて、一層の大勇猛心を發し。五劫といふ驚くべき長時間を費し、親見せしめられた諸佛の國土を參考として、最高最上の淨土建立の因たる清淨之行を選擇攝取せられました。これを五劫の御思惟と申すのであります。かくて、選擇攝取し畢られた菩薩は、重ねて師佛の所に詣でゝ、超世の大願を遂一言上せられるのでありました。それがすなはち、有名な四十八願であります。

この四十八願は『大經』の骨目であると同時に、淨土敎の中心生命となるものでありますから、古來學者間ではいろ〳〵と考察研鑽が致されて居ります。その一端を申述てみますと、一般に廣く用ゐられてゐるのが、淨影、憬興二師の三分說で、これは四十八願を三種に分類するのであります。（一）攝法身の願——菩薩自らの佛身成就に關する願で、四十八願中の第十二光明無量の願、第十三壽命無量の願、第十七諸佛咨嗟の願の三願がこれに當ります。（二）攝淨

土の願、――極樂淨土建立に關する願で、第三十一國土清淨の願、第三十二寶香合成の願を云ひ。(三)攝衆生の願――一切衆生をして淨土に往生成佛せしめやうとの願で、四十八願中まへの五願を除いた他の四十三願をこれに充當します。また四十八願の配列の上に就ても、三つに分別して伺ふ觀方があります。それによりますと、初め第一願から第十六願までの十六願を拔苦與樂の義をもつた願であるとし、次に第十七願から第三十二願までの十六を、攝諸衆生の義のあるものと見。後の第四十八願までの十六願を、種々利益の義を願じたものであるとみるのであります。斯うした四十八願の見方は、別に批議すべき點もありませんが、どうも學解的な傾きが強いやうに思はれます。宗教的見地から申しますと、四十八願の眞生命を卒直に把かまれた、わが親鸞聖人の四十八願觀は、何んと云ふても、他の追從を許さぬものでありませう。

親鸞聖人は、四十八願を味ふ上に於て、三分說や、善導大師の一願結歸の見方などをも用ゐては居られますが、その四十八願觀としては、聖人獨自の眞假分判があります。それは第十八念佛往生の願を、眞實本願として仰がれる、絕體他力信仰の境地からして、第十九修諸功德の願、及び第廿植諸德本の願を以て、諸行または自力念佛の如き佛の非本願行を因とするから、方便權假の願であると判然分別せられたのであります。すなはち、聖人は自ら『眞佛土卷』に、「然るに願海に就て眞あり假あり、是を以てまた佛土に就て眞あり假あり」と述べて居られます。この意によつて四十八願を、眞假に區別してみますと。

眞實願は、第十一必至滅度の願、第十二光明無量の願、第十三壽命無量の願、第十七諸佛咨嗟の願、第十八念佛往生の願、第二十二還相廻向の願、第三十五變成男子の願で。方便權假の願は、第十九修諸功德の願、第二十植諸德本の願

第二十八道場樹の願であり。他の三十八の願は、義に從つて或は眞實に、または方便に配せられることゝなるのであります。かゝる聖人の眞假分判の根據は第十八願であると申しましたが、それは第十八願は衆生往生の唯一の白道であり、法藏菩薩發願の基調は衆生救濟の一途より外にない、從つて四十八願の眞生命は第十八願にあるわけであります。聖人はかゝる菩薩の誓意を全領して、勇敢に願海眞假の分別を斷行せられたのであります。

されば茲に、四十八願の中心生命たる、第十八願の願意を窺へば、他のすべての願は、おのづから其中に含まれてくることになるのであります。さてその第十八願とはどういふ願であるかと申せば、願文は斯う記るされてあります。

設我得佛、十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念、
若不生者、不取正覺、唯除五逆誹謗正法。

このうち、至心、信樂、欲生を三心と申しまして、文字はそれ〴〵違ふてはありますが、その意は一つで三つながらまことゝいふことであります。すでに天親菩薩は、この三心を領受して一心歸命と頂いて居られますが、親鸞聖人はこゝの意味合を『信卷』に問答を設けて、懇ろに示し下されてあります。そこのところを一寸讀んでみます。

「問ふ、如來の本願已に至心信樂欲生の誓を發したまへり、何を以ての故に論主一心と言ふや。答ふ、愚鈍の衆生解了し易からしめんが爲めに、彌陀如來三心を發し給ふと雖も、涅槃の眞因はたゞ信心を以てす、是の故に論主三を合して一と爲る歟。私に三心の字訓を窺ふに三は即ち一なるべし、その意如何となれば、至心と言ふは至は即ち是れ眞なり實なり誠なり。心といふは即ち是れ種なり實なり。信樂といふは、信といふは即ち是れ眞なり實なり

誠なり滿なり極なり成なり用なり重なり審なり驗なり宣なり忠なり。樂といふは即ち是れ欲なり願なり愛なり悅なり歡なり喜なり賀なり慶なり。欲生と言ふは、欲といふは即ち是れ願なり樂なり覺なり知なり。生といふは即ち是れ成なり作なり爲なり興なり。明かに知んぬ、至心は即ち是れ眞實誠種之心なり。故に疑蓋雜はることなきなり、信樂は即ち是れ眞實誠滿之心なり極成用重之心なり審驗宣忠之心なり欲願愛悅之心なり歡喜賀慶之心なり故に欺蓋雜はることなきなり、欲生は即ち是れ願樂覺知之心なり成作爲興之心なり大悲廻向之心なり故に疑蓋雜はること無きなり。今三心の字訓を按ずるに、眞實の心にして虛假雜はることなし、正直の心にして邪僞雜はることなし。眞に知んぬ疑蓋間雜なきが故に是れを信樂と名づく、信樂は即ちこれ一心なり一心は即ちこれ眞實の信心なり。この故に論主、はじめに一心と言へるなり

と、應に知るべし。」

これによると、三心はいづれも誠實心といふことで、凡夫虛僞の心中のどこにも誠實のこゝろはない、たゞ佛智の不思議を素直に信受するところに、おのづから誠實心が廻向せられるといふ、まことに絕對他力の妙趣であります。しかもこの大信海から流れ出る、乃至十念の稱名が、一聲一聲そのまゝ報謝の行業として、自然に惠まるゝのであります。かくてこの信の一念には、往還二種の廻向の名に於て、四十八願に顯現せられたる如來の眞實のすべてが、行者のうへに附與せられるのであります。げに超世不倶の王本願たる第十八願の成就こそ、一切群萌に惠ぐまるゝ眞實の大利であつたのでありました。

偖て、法藏菩薩はこの四十八の大願を、師佛の前に宣說し終られるや、重ねて偈頌を以てこの四十八願の綱領を誓ひ、且つ斯の「願もし尅果すべくんば、

大千應に感動すべし、虛空の諸の天人、當さに珍妙華を雨らすべし」と宇宙に向つて、呼びかけられたのでありました。すると時を移さず、大地は六種に震動し、妙華は天上より繽紛と雨らし、微妙音樂は自然に奏でられ、「決定して必ず無上正覺は成就せられる」と、大宇宙は混然として讃めたゞへたのであります。

爾來、菩薩は永劫を期して、實際の修行にとりかゝられたのである。師佛の教への如く、一向に精進し專念に奮勵せられ。努力の効虛しからず、自利々他滿足して正覺を成就して阿彌陀佛となられたのであります。この正覺を成就せられたのは、すでに十劫の以前でありまして、その正覺の內容は、筆舌思慮を超絕したもので、とても諸佛の智慧をもつてしても窺ひ知ることのできぬと云はるゝほどに、至高極尊のものでありました。かつその正覺を表象せらるゝ佛身は超世の悲願に酬報し給へるもので、法報應の三身を融攝した眞の報身佛であられるのであります。かく佛身の成就せられると同時に、一方では其佛身所居の國土である。無上高妙の極樂淨土が眞實報土として建設せられたのであります。經文では、斯うした正覺成就の有樣を、主佛莊嚴、眷屬莊嚴、國土莊嚴の三つに區分して、實に洗練せられた字句を連ねて詳細に記述されてあります。これを天親菩薩は、その著『淨土論』に於て、三嚴二十九種の功德莊嚴相として讃仰して居られます。此處のところを少し詳しく申上げたいのでありますがとても時間がありませんから、別の機會に「三種莊嚴」とでも題してお話することにして、今回は割愛することゝいたします。さていろ〳〵と、淨土の莊嚴相を示された最後のところで、華光出佛といふ一段があつて、十方三世の諸佛如來はいづれも、この極樂世界の寶蓮華の光明の中から出現せられ、微妙

の法たる阿彌陀佛の本願を宣説したまひ、十方無量の有情をして、佛道の正意に安住せしめたまふ趣きが述べられてあります。この華光出佛の説法を以て『大經』の上卷は終つてゐるのであります。

次に下卷に移りますと、初めには、衆生往生の因果――私共の救はれてゆく相と救はれたうへの功德とが説かれてあります。救はれてゆく相としては、佛の本願たる念佛往生と、非本願たる諸行往生との二類が説かれてある。こゝにも廣大無限なみ佛のお慈悲の一端を窺ふことができます。それは、法藏菩薩の志願成就としては、その眞實本願である第十八願の成就だけを擧ぐればよいわけであるのに拘はらず、非本願たる第十九第廿の諸行往生の成就までが示されてあることであります。諸行往生とは先きにも述べたやうに自力を捨て切らない人達が、道德や持戒や諸善萬行で、極樂淨土へ往生しやうとするので、彌陀教の立場から云へば、明らかに異端者であるそれをも、見棄てることをあそばさずにお淨土の一部に方便化土をしつらへて、一應は迎へ取らうと仰せられるのであるから、まことに量り知られぬお慈悲と云はねばならぬ。

私共の救はれてゆく相――衆生往生の因を説き了られると、つゞいて、救はれたうへの功德――衆生往生の果が示されてあります。これには、いろ〳〵の功德が明かされてありますが、大別してみますと次の五つに攝めることができます。すなはち、一生補處の德、供養諸佛の德、聞法供養の德、説法自在の德、自利々他の德等であります。勿論、これらの諸功德は、み佛の眞實本願たる第十八願念佛往生の行者が享受する利益であつて、その實を云へば不可思議無量の功德であります。かく眞實報土の往生人は、み佛の加護によつて何等の怖畏も誘惑もない世界で、空無相無願三昧、不生不滅三昧など云ふ最高級の禪定を

修め、あらゆる波羅密行を體得し、大菩薩としての資格と實質とを、安樂喜悅のうちに充足せしめられるのであります。かやうな往生人の功德を、縷々詳說さられた後に、佛陀は阿難に向つて「我、たゞ汝のために畧して之れを說いたのである。もし廣く說くならば、恐らく百千萬劫の長時にわたつても、窮め盡すことはできないであらう。」と云ふて居られる。かくて衆生往生の因果を說き了られると、大經の會座に一大變化が起つてまゐります。

いまゝで釋尊は、阿難よ阿難よと阿難尊者を對告者として說法せられてゐたのが、忽然として、何等の豫告もなしに「佛告彌勒薩菩諸天人等」と、彌勒菩薩を對告者として呼び出されたのであります。彌勒菩薩はまた阿逸多とも云ひ慈氏と譯せられてゐるお方で、菩薩の最高位に居られ、釋尊に次いで當來の世に出で佛陀として說法化益せられる筈で、現にいまは兜率の內院で諸天や菩薩のために說法して居られると云はれる程に、尊い菩薩さまであつて、殆ど果上の佛陀と同じくらいであるといふので、時には彌勒佛とまで崇められてゐられるお方であります。その彌勒菩薩を、いま不意に「佛告彌勒菩薩」と呼び出されたのであるから、一座の聽衆は、それ一大事出來といふので、みんなが居住を整へなほしたことでありませう。

ところが、彌勒を相手として說かれたのをみると、これはどうしたことか人間世界の道德が主なものでありました。それを悲化段と申しますが、そのうちでも主なるものは五惡段と云はれて、仁義五常の道に背く行爲を誡めて居られます。すなはち、初めに貪欲、瞋恚、愚癡三毒の煩惱を起して苦患を深めてゆくことを說き、次に五惡の一々を具さに示して、第一惡は無道にして仁を行はぬもの、第二惡は義理を缺き佞諂不忠のもの、第三惡は禮節を辨へず婬姧攻劫

をことゝするもの、第四惡は無智にして妄語自尊するもの、第五惡は不信にして亡恩非道なるもの、これ等の逆惡無道の行爲を誡め、人間たるものは、宜しく意志を堅固にして、坐作進退に節度を整し、五善を奉行すべきことを勸めてゐられるのであります。かやうに菩薩の最高位に居られる彌勒に對し、何せ態〻人間道德を懇諭せられたのであらうか。それには深いお思召がなくてはならぬ。元來彌陀の本願は萬機普益といふて、一切群生がその化益を被むるのであります。一切と云へば上は等覺の菩薩さまから、下は底下の凡夫、否、蠕動の類に至るまですべてといふことである。如來さまの方からすれば、菩薩も凡夫も一樣に迷へる有情であります。それがどうかすると、有情の方で差別をつけて、少しばかりの智慧が働き修行が積まれると、いかにも自己は立派なものであるやうに考へ、自己を高擧して他人を見下げます。この高あがりのこゝろがどれたけ悟りの邪魔になるかは、實に豫想の外であります。自己を高擧する高慢なこゝろは、何ものをも素直に享け容れることを障へぎるものである。そのためにお慈悲をお慈悲と悅ぶことができない。救ひの前にありながら救ひから遠ざかつてしまふ。斯うした躓きから、永劫に迷ひを重ねてゆかねばならぬといふことは、まことに悲しいことであります。佛陀の善巧は茲に顯はれて、最高最上の地位にある彌勒を麾ねいて、有情苦惱の現狀と人間道德とを說かれたのであります。道德は人の人たる道で、何人でも守るべきが當然で、また守らねばならぬものであります。如何に高位高官なものでも、俺れは偉いのだから道德なぞはどうでもよい。そんなものに拘泥する必要はないと云ふやうなわけはない。地位の高下を問はず、すべてが同樣に守らねばならぬのが道德である。否、寧ろ地位が高ければ高いだけそれだけ、餘分に堅く守らねばならぬのであ

ります。そう云ふ理由で、彌勒菩薩と云へども、この敎誡の前には頭が上らない。一々御尤で御座ゐますと領納し反省せねばならぬ。いま彌勒菩薩は、斯うした敎誡を敬虔な態度で、頭を下けて拜聽して居られる。すると釋尊は、最後に「彌勒よ、汝等おの〳〵よく自らを省み、またお互に誡しめ合ふて、佛の敎へに背犯するやうなことがあつてはならぬぞ」と、諭されて居られます。こゝまでくると、どうだう最上位の彌勒が最下の凡夫と、判然同列に扱はれたことがわかつてきます。そこで、彌勒さまも素直に合掌稽首して「受佛重誨不敢違失――かくも懇切な敎誨を蒙りましたうへからは、決して〳〵違背いたしたり失忘したりすることのないやうに心得ます」と申上げて居られますが、これは實に尊い態度であります。かゝる素純な態度こそ、法を眞實に享けとる道であります「幾度も聞かせては頂きながら、どうもはつきりと致しませぬ。まだ信

せられませぬ」なぞといふことは、よく聞かされることでありますが、それは斯うした素直さがないからであります。凡夫の淺はかな智慧に囚はれて、さかしらにも如來誡實のみ言に、さま〴〵と計ひだてをするために、佛智を領受することができ難いのであります。さうした人達は、この彌勒菩薩の素純な態度のまへに、ふかく慚愧すべきであると存じます。かくして大慈大悲のまへには罪障の輕重、地位の高下といふやうなことは問題でなく、すべてが同樣に、救はれなくてはならぬ存在である義を顯示さられたのであります。

五惡段が終ると、釋尊はまた阿難に呼びかけられ、佛力を以て極樂淨土莊嚴相を、そのまゝ示現して、四衆のために之れを觀見せしめ、信の世界を深められる一段がありまして、これを「靈山現土」または「現土證誡」と申します。

この靈山現土の中に化土をも見せられましたが、それに就ては、また彌勒を

起用して問を出させられて居られます。この一段は「胎化段」或は「智慧段」と申しまして、佛智を疑惑しながらも、淨土往生を願ふ衆生を見棄てるには忍びず、別意の慈悲をたれて、それ等のため特に化土を建設し、疑惑の習氣のぬけきるまで教養せられます。その有様が恰度蓮華の花の中に、閉じ込められてゐるか、母の胎内に籠つてゐるやうなので胎生と名づけられたのであります。これに對して、眞實報土の往生相は、佛智不思議のはたらきで、無生の生を體得するのでありますから、化生と申すのであります。

いま彌勒が「お淨土には何ういふ因緣で胎生化生の別があるのですか」との問に對し、それは佛の不可思議なる無漏清淨の智慧を疑惑するからである。すなはち、限りある有漏の凡智で、如來のおこゝろを忖度し、自己の不明から佛智がわからぬのを棚に上げて、勝手自儘に振舞ひ、如來さまの御本意でない雜行雜善に、浮身を俏し、自擧高慢に陷るからさうした世界に自ら閉じ籠るのであると誡められ、且つ素直に佛智を享受した念佛の行者は、眞實報土に化生して、三十二相八十隨形好を具へ、光明も智慧もその他の功德すべて、如來さまと同様の證果が惠ぐまれるのであると述べられてあります。かく自己の智慧に自惚れる躓きが、疑惑の罪過として胎生の境界を生ずるのであるといふことを。因位に於ける最高な智慧の所有者である、彌勒菩薩に對して誡められたことを單なる皮肉としてのみ觀過してはならぬ。これはこのまゝ、私共の頭上に打ち下されたる至高愛の鐵槌として、甘受しなければならぬのであります。お互に他を顧みて言ふの愚を學ばずに、眞面目に内省しなければなりますまい。以上で釋尊の勸誡が了りまして、續いて「流通分」となるのでありますが、與へられたる時刻が少々過ぎて居りますので、急いで申上げることに致します。

流通分には、三つの要點があります。一つには一念付屬、二つには聞法得益三つは現瑞衆喜であります。一念付屬といふのは、將さにこの說法を終了らうとして、釋尊が自分に次でこの世界に、佛陀として出現したまふことに決定してゐる彌勒菩薩に、三世諸佛の常規に從ひ、自分の本意でもあり、また久遠から永劫にかけて永久不變の絕對眞實である彌陀法の受授を果たさんが爲めに、一念の大行を付屬せられたことをいふのであります。聞法得益とは、この『大經』の說かれたとき、靈鷲山に聽衆として參會して居られた、萬二千那由他の人數は、淸淨法眼として初果の證を開き、二十二億の諸人民は、阿那含として不還の果を得、八十萬の比丘衆は、阿羅漢の位に登り、四十億の菩薩達は、不退轉地に到達することができ數へ難きほど多數の衆は、他力の大信心に安住することを得たと記されてあるところをいふのであります。

現瑞衆喜とは、まさしくこの說法の終結がつげられたとき、天地にはいろ〳〵な奇瑞が現はれ、一會の聽衆は、天に躍り地に舞ふほどの喜悅を享受せられたと云ふのであります。これは、いづれの經典にでもその末尾に按ぜられる讚仰のこゝろを表現した文章でありますが、いまは特に、私共にこの經意を聞持して、如斯に觀喜信樂せよと敎示せられたものとして、厚く頂戴いたすべきでありませう。

以上で『大經』の槪略を、極めて粗雜ではありましたが申述べたことゝ思ひますので、本日はこれで失禮いたします。

聖道權化の方便に　衆生ひさしくとゞまりて
諸有に流轉の身とぞなる　悲願の一乘歸命せよ

第三講

今日は『觀經』と『小經』との概略を申述べることになつて居ります。そのうへで三經全體に就て一つ二つのお話をいたしまして、この講座の結末を告げたいと存じます。だいぶん無理なことゝ思はれますので、少々時間を餘分に頂くやう申して置きましたから、そのおつもりでお聽きを願ひます。

偖て、この『觀經』を解釋するのに、天台、嘉祥等多くの諸師は矢つ張、大經のときに申しましたやうな、三分法を適用して居られますが。このお經に就て古今を楷定する名釋を下された、かの善導大師は、特に佛の正意を闡明せんがために、通例の序正流通の三分を開いて五門の解釋法を設け、もつて經意の奥底を徹見せられたのであります。五門といふのは、序分、正宗分、得益分、流通分、耆闍分の五つに分けるので、淨土敎ではすべてこの分科法に隨ふことになつて居りますから、いまもこの善導大師のお釋によつて窺ふことにいたします。

これに依りますと第一門序分は、六事成就のうち「如是我聞」の信成就と聞成就の二つだけが、證信序といふことになり、その他は發起序の方へ組み込まれることになつてゐます。さうして發起序はまた、化前序、禁父緣、禁母緣、厭苦緣、欣淨緣、散善顯行緣、定善示觀緣の七節に分れます。化前序といふのは、敎化に前立つ序文で、時、主、處、衆の四成就が擧げられてゐますが、善導大師が特にこれに化前序といふ名稱をつけて、發起序の一部とせられた意をふかく味ひますと、化前とは一代化前のことで、釋尊御一代、半滿權實の說法は、いまこの『觀經』を說かんがための方便施設であると見るのであります。そこで善導大師は、六事成就のうちの四成就をもつて『法華經』說法のありさ

まを示されたものと考へ、華嚴でも般若でもすべて御一代の說法は『法華經』と同じく、調機誘引の敎說である。さればこそ、機緣が熟し韋提希夫人の請願となると、一乘法華の妙法を說きたまふ眞つ最中であるにも拘はらず、その會座を沒して王舍城中に降臨したまひ『觀經』の御化導が開展せられたのであるとの見地から、この一段を化前序と名づけ發起序のうちに收められたのであります。

發起序の第二段は、禁父緣と申します。これは第一講で一寸申て置たやうに阿闍世太子が、父の頻婆娑羅王を、七重の座敷牢へ監禁したありさまを述べたところであります。何故にこんな逆惡が起つたかといふ、その原因を簡短に申しますと。頻婆娑羅王は相當に年齡を老られたが、相續せらるべき王子が一人もおできにならなかつた。そこで當時一般に行はれてゐた印度の風習に從ふて相師に占はせたところが。相師のいふには「きつと王子樣はお產れになります、しかしそれは數年後のことであります。その理由は、大王の王子として產れたまふのは、いま山中に籠つてゐる仙人でありまして、數年の後その命が盡るとやがて大王の王子としてお誕生遊ばすのでありますから、それまで暫らくお待ちなさらねばなりませぬ」とのことでありました。けれども王は、その日のくるのを靜かに待ち受けるには、少し年齡をとり過ぎて居られた。そこで侍臣に命じて密かにこれを殺害せしむることゝされ、侍臣は王の命令だからといふので、その仙人を殺した。その時、この仙人は「この恨みは必ず報いるぞ」と呼んで死んだとのことであります。一方王妃韋提希夫人は、仙人が殺害されると間もなく、懷胎せられました。そこでまた相師に、胎兒の將來を占はせたところ「お產れなさるのは男子に相違ないが、何故か深い恨みを含んでゐられる樣

子でありますから、將來ご兩親に仇をなさるかも知れません。それ故よく注意してお育てなさらねばなりますまい」と申上げたので、兩人で相談のうへ、高樓から產み落してひと思ひに殺した方が、後の患ひがなくてよろしからうといふので、地上に劔を敷いてその上へ產み落されました。ところが幸か不幸か、王子は小指一本を失つたゞけで、生命には別條がなかつたのでありました。かく命冥加のあるのは、諸天が守護して居られるからだらうとのことで、殺すことを止め、却つて大切に育て上られたのが、この阿闍世太子であります。阿闍世といふ名前は、未生怨と譯されますが、それは斯うした因緣から名づけられたものであるといふことであります。

因緣といふものは恐ろしいもので、これが因となつて、いろ〳〵な事件が出來してきたのであります。由來、因の發生には、必ず緣を要します。恰も植物の種子は因であるが、これに雨露土壤日光等、幾多のものが緣となつてその因を助けねば、發生しないやうなものであります。そこで今この未生怨の因の發生には、何が緣となつたかと云ひますと、それは、かの提婆達多の敎唆が、最も力强い緣となつたのであります。提婆達多といふ人は釋尊の從兄弟で、釋尊が三十二相を完備して居られたのからみると、足下千輻輪と眉間白毫の二相だけが不足してゐたが、三十相を具へて居られ可なり總明な方であつた。しかるに功を急ぐのあまり時々失錯があり、ことにその賢さが仇となつて、釋尊の晩年には自からその後繼者を以て任じ、度々敎團統率權の讓渡しを逼つたが、釋尊は彼れの性格が圓滿を缺いてゐる上に、名利を求める念の深いのを顧慮してにべもなくその要求を貶ぞけて許されなかつたのでありました。そこで提婆達多は、暴力に訴へても欲望を果さうと決心して、いろ〳〵と謀略をめぐらし、

逆に釋迦教團の反逆者となつたのであります。釋迦教團に反抗するためには、どうしても有力な後援者がなくてはならぬと考へた彼れは、まづ第一に當時の大國であつた、摩伽陀國に眼をつけたが、何分にも國王頻婆娑羅は大の釋尊歸依者であつたから、それから先に處置をつけねばならぬと云ふので、太子阿闍世の偏狹輕燥な性質を利用しやうと企らみ、言葉巧みに取り入り自家藥籠中のものとしたうへ、先に述べたやうな太子出生の賓緣を細々と語り「父王はまさしくあなたの怨敵である。しかも老齢の王はいつ何時崩ぜられるかも知れない。今にしてあなたが仇を執はねば終にその機を得ることは難かしからうと思はれます。早くお弑しなさい。そうしてあなたは王位を繼承せられ、この大國の力をもつて、四隣を平定し全印度に君臨する轉輪聖王としての榮曜をお享けなさい。私はまた、かの老比丘たる釋迦を弑して、新らしき佛陀として教團を組織し、あなたの覇業をお助け致しませう」と上手に唆かしたのであります。斯うした、提婆達多の隱謀が助緣となつて、こゝに惡逆無道な王舍城悲劇の幕が、切つて落されたのであります。

阿闍世太子は、王位簒奪を決心すると、父王を七重の室内に幽閉し、群臣のこれに接近することを嚴禁し糧食を斷つて、その餓死せられるのを待つことゝしたのであるところが、韋提希夫人が、密かに食物を運んで王に給仕せられ。また目犍連といふ聖弟子は、王の請を容れて日々潛行して來て八齋戒を授け、富樓那尊者は釋尊のお使者として說法にこられるといふやうな按梅で、身心兩面の糧に缺くことがなかつた爲めに、三七二十一日を經ても、少しも憔悴せられることはなかつたのでありました。

阿闍世太子は、多分もう父王は餓死せられたことゝ考へ、番人を呼び出して

様子を尋ねてみると、意外にも父王は以前にも増して健かに在らせられる。その理由はしか〳〵かやう〳〵と申上げたので。躁急な太子は、みる〳〵烈火のやうに憤激して「母は賊であり沙門は惡人である」といふので、忽ち劔を拔いて母親韋提希を斬り弑さうとされる。それをみて、耆婆、月光の二大臣が、これを遮ぎり「吠陀聖典の中には、位を貪る惡王が、その父を弑したといふ話はかなり澤山に出てゐますが、未だ曾つて母を殺したと云ふやうな無道な者のことは一人も見當りませぬ。もし是非にもとのことなれば、いたし方がありませぬ。そんな人非人の所業をなさる方は、この光輝ある王舍城の王族として、一日も此處にお止まりを願ふわけにはまゐりませぬ」と諫止したので、殺すことだけはやめて、これをもまた、奥深い宮室へ閉ぢこめたといふところが、第三段の禁母緣となるのであります。

第四段の厭苦緣といふのは、韋提希夫人が深宮に幽閉の身となると、そこは女性だけに、いろ〳〵さま〴〵な追憶と推測とが加はつてきて、現實苦を一層深刻なものにしてしまひます。斯うした身も世もあらぬやるせない、惱みにさいなまれた彼女は、靈鷲山に向つて「世尊を直接御請待申上げることは、かゝるむさくるしい場所でありますから、御遠慮いたしますが、どうぞお弟子の阿難目連の二聖者をお遣はし下さつて、尊いみ法をお聞かせくださいますやう」とお願ひ申すのでありました。この願ひを照覽せられた釋尊は、かの法華一乘の妙法を說いて居られた最中であられましたが、直ちにそれを中止すると、阿難目連の二弟子を引きつれて、王舍城へ馳せつけられたのであります。韋提希は、思ひ設けぬ釋尊の御來臨に、恐縮しながらも、いろ〳〵と現實の苦惱を訴へたうへに「何うした宿世の惡業で恁んな阿闍世のやうな惡い子を持つたので

ありませう、また世尊の御眷屬の中に何んの因緣であんな提婆達多の如き惡人があるのでせう、妾はもうこんな怖しい苦惱の世界は厭になりました」と愚痴の數々を並べたてゝ居らるゝのであります。

「人生これ苦なり」とは、釋尊の喝破せられたところでありますが、どうも人間は平生無事平穩の狀態に置かれてゐると、いつも人間苦を見逃がしてしまひます。けれども、何か變つた問題に打ち當つて、不如意を感ずると、初めて「人生はこれ苦なり」と云ふことの片鱗を握み得て、今更のやうに惱むのであります。その問題が大きければ大きいほど、人生に對する懊惱は一層深かめられるわけで、その際、指導よろしきを得ば、終には「人生これ苦なり」といふ人生觀の奥堂に參徹することができ、一轉して正法に隨順する世界がめぐまれるのであります。いま韋提希夫人は、吾が產の子のために、夫もわが身もそれ〴〵幽閉の憂き目をみせしめられたといふことが、如何にも殘念であり、またこの上もなき悲痛な事として、堪へ難き苦惱の深淵に沈吟するより外はないのであります。因果の顯はれで、自業自得の業報であるとは云へ、昨日までは一國の王妃として、萬民に傳づかれた者が、一朝にして幽囚の身となつては、その境遇の激變に感慨無量のものがあつたことは、實に想像に過ぐるものがあつたことでありませう。かくて韋提希夫人は、人間苦の奥底に徹し、厭離穢土の實感を表明せられるのが、この一段であります。

次に第五の欣淨緣とは、人間苦を徹見した韋提希夫人は、一歩を進めて「惡聲を聞かず惡人を見ざる世界は、何處にムゐますか敎へたまへ」と願ふた。この切なる願求にほだされて、釋尊は眉間の白毫相より光明を放ち、十方諸佛の國土をお見せになり、そのうちより、彼女の欲求する世界を自由に選擇せしめ

られた。ところが夫人は、他の佛土には目もかけず「世尊、どの國土も結構では厶ゐますが、妾はあの極樂世界の阿彌陀佛の御所へ參りたいと存じます。さてそこへはどうすれば參れますか、その道を敎へていたゞきたう厶います」と一向に西方願生を愛樂せられたのであります。まことに西方阿彌陀佛の極樂世界こそ、萬機趣入の國土であつて、極惡最下の者のために、しつらへられたる極善最上の眞實報土であります。されば此の韋提希夫人も、釋尊出世の本意を體して、茲に阿彌陀佛所に往生せんと、西方願生の希望を表白せられたのであ

る。この一段を、欣淨緣といふのであります。

第六の散善顯行緣と申しますのは、釋尊は、いま夫人が諸佛世界のうちから特に極樂淨土を選擇したことをもつて、吾が意に契へりと思召し、別室に幽閉せられてゐる頻婆娑羅王にも徹照する程の怡悅をもつて、韋提希夫人に「汝に

はまだ合點がゆくまいが、阿彌陀佛の世界は此處を去る西方十萬億土といふてゐるが、實は信心の眼さへ開けば、すぐ傍にみ佛を見奉ることができるのである。汝もやがて、そこに氣付かせて頂くことであらうが、一般の人達は、信心の眼を開かせて頂くよりもさきに、淨土へ往生する爲めの行業は如何なるものであるかを、聞きたがるものであるから、二種に區分してそれを說かうと思ふ汝もよく聞くがよい。その一つは散善と云ふて、三昧靜觀の境地に入ることの出來ない。精神の散動する者のために、三福の善行を說くのである。第一善は世福といふて、一般道德を嚴格に守ること。第二善は戒福で、佛の制定せられた戒律を誤りなく遵奉すること、第三善は行福であつて、大乘所說の萬行を勤修することである。これは三世諸佛淨業の正因であるが、詳細は後で語らう」と、後に說かれる三福九品の基礎を、豫告された一段であります。

最後の第七定善示觀緣といふのは、次の正宗分に說き明される、十三の觀法の緣起となるもので。こゝでは釋尊が夫人に對し、特に「汝はこれ凡夫なり、心想羸劣にして未だ天眼を得ざれば、遠く見ること能はず、諸佛如來に異の方便ましまして、汝をして見ることを得しめたまふ」と說かれ。たとへ未來の衆生にして、靜觀に堪ゆる者があつて、淨土を觀ずることがあつても、それは佛力他力によるのであると。定善十三觀の觀法は、他力示觀による旨を明される一段であります。

以上で『觀經』の發起序を、大略お話し申上げましたから、續いて「正宗分」に入りますが、これも詳しく申せば、つい專門的になりお聞き苦しいことゝ存じますので、必要なところ以外は、出來るだけ簡潔に申し舒べることゝ致します。

第二門正宗分には、總じて十六の觀法が說かれてありまして、これを、定善觀十三、散善觀三に分つのであります。

初めに定善觀といふのは、定善とは、息慮凝心と申しまして、人間の智慧でいろ〳〵と思慮分別する——あゝだこうだと思ひ計らふことを息め、散亂する心の働きを凝と引き締め一定せしめる、といふので、つまり三昧禪定に入つて觀察することを云ふのであります。これに今は、十三の種類が擧げられてあります。すなはち、日想觀、水想觀、地想觀、寶樹觀、寶池觀、寶樓觀、華座觀、像觀、眞身觀、觀音觀、勢至觀、普觀、雜想觀の十三觀であります。この十三のうち、日想觀から華座觀に至る七觀は、極樂淨土の物質的果報を觀察するので、これを依報觀と云ひ、眞身觀から終りの雜想觀までは、正しく彌陀觀音等の聖體を觀ずるので、これを正報觀と申します。

これらの十三觀の一つ〳〵の概略を、一通りお話しいたしますと。

第一日想觀とは、太陽の西に沒するのを觀ずるので、日沒處の西方なるによつて西方極樂世界を思ひ、また日光を遮へぎる雲霧等を緣として自己の業障の重きを知り、赫々たる光輝によつて如來の光明の威大なるを觀ずるのであります。

第二水想觀は、水の清澄なるを見て淨土の清らかさを思ひ浮べるのである。また水が氷となることを想ひそれを緣として、淨土の瑠璃の大地を觀じ、その上で無量妙寶の莊嚴相を想へと云ふのであります。

第三地想觀とは、前の方便觀たる水想觀より、漸次に進んで、眞の極樂國土の大地を觀察するのであります。

第四寶樹觀は、極樂の大地を觀じ終れば、その上の寶樹を觀察し、その廣大にして色彩の調和せると序列の正しいことをよく見ねばならぬことを說き。

第五寶池觀とは、まさしく極樂世界の寶池の八功德水——清淨潤澤、不臭、輕、冷、美、飲時調適、飲已無患の尊さを思ひ、またその池中の蓮華の七寶合成にして立派であることを觀想せよといふのであります。

第六寶樓觀は、百寶をもつて出來上つてゐる樓閣宮殿を想ひそこに、無數の樂器があつて、いづれも念佛念法念僧の三寶歸依の妙法音を宣說してゐることを觀じよといふのであります。

第七華座觀では、住立空中尊が說かれ、續いて佛の御座所たる、寶蓮華で出來た華座の尊高なることを觀想すべき旨が述べられてあります。

以上の七觀は依報觀でありますがそのうちで、第一第二の二觀は、直接淨土の依報を觀するのでなく、太陽や水氷によせて、淨土の莊嚴を觀するのである

から、これを假觀と云ひ、後の五觀は、まさしく淨土の相を觀ずるのであるから眞觀と申します。尙ほ第七華座觀に就て、他師はこれを正報觀と見られますが、善導大師はやはり、依報觀とせられそのうへで、前の六觀を通依報とし、第七を別依報と釋して居られます。

第八像觀以下は正報を觀ずるのでありますが、この第八觀は次の眞身觀に入る方便のための觀で、これも假觀と申します。最初から眞佛を觀ずることは困難であるので、こゝでは假想的に佛を觀ずるのであります。

第九眞身觀、これから第十三までは眞觀でありまして、こゝでは正眞の阿彌陀佛を觀ずるので、初めに身相を觀じ、進んで「光明徧照十方世界念佛衆生攝取不捨」とみ佛のお慈悲までも觀ぜよといふのであります。

第十觀音觀、第十一勢至觀、この二つは阿彌陀佛の左右の脇士たる、觀音勢至の二菩薩を觀ずることによつて、本佛の慈悲と智慧とを味ふのであります。

第十二普觀、以上を觀じ終れば、こんどはいま一足進めて、自分自身がまさに極樂淨土へ往生を遂げて、眼のあたりに三種莊嚴の相を拜見させて頂だく想をなせよといふのであります。

第十三雜想觀とは、佛身を觀ずるに、眞佛の如く無量那由他の大身と丈六の小身とを自由自在に觀ずることができるといふので、雜想觀と名付けられたのであります。

これらの觀法は、三昧禪定の可能なる行者の修し得るものでありますから、定善觀と云はれたのであります。

次に散善九品をお說きになつて居られます。散善といふのは、單に惡を止めて善を行ふので、謂ゆる廢惡修善のことを云ふのであります。これが、上輩觀、

中輩觀、下輩觀の三觀に分れ、各々の觀のもとにまた上中下の三品が區別されますので、九品と云ふのであります。

上輩觀とは、大乘の修道を行する人々を、上中下の三種に分別して示されたもので、先に述べた、行福の修められる人達であります。

中輩觀には、上中の二品は小乘を學ぶ人を擧げて、佛の定められた制戒を嚴守することのできる、戒福に堪へ得る機を示し、下品では、世福の修し得られる善凡夫を出して、世間道德の實行者が彌陀淨土へ參る相が說かれてあります。

下輩觀は三品ながら三福無分の機と云ひまして、何んら善根のないもので、下品上生は十惡の人、下品中生は破戒の人、下品下生は十惡五逆の罪人であります。そこで斯樣な惡人が散善の行者の中に同列に說かれてあることはどうしたことか、といふ疑問が起ります。これは一應尤もな疑難のやうではありますが、よく經文を味はふと、會得がゆくのであります。元來『觀經』は第十九願開說の經でありまして、お經の當面では、念佛は修諸功德の一分で、善根功德としては三福と同列に置かれて居ます。そこで下輩の三品は三福無分の惡人ではあるが、いづれも最後には念佛を稱へてゐる、その點でいま散善のうちに說き明かされたのであります。

時間の都合上、正宗分は、ほんの名目だけを申上げたゞけでありますが。茲で一言申添へねばならぬことがあります、それは、正宗分を大觀いたしますと初めの定善十三觀はいづれも、三昧堪能の聖者であるのに。散善三觀の行者はすべて凡夫であります。その中には大小乘の修學をなし得るやうな賢いものもあれば、下三品の如き逆惡の罪人もありますが、要するところ、どれもこれも散亂放逸の凡夫であります。これに就て善導大師は、定善觀は韋提希の請願に

應じて說かれたものであるが、散善觀は釋尊自開の說といふて、特別のお思召から述べられたものであると、獨自の解釋を下してゐられます。すなはち、定善觀は、聖者的觀念の世界であり、理智の境地であつて、凡人實修の道ではありません。釋尊はまづ、かゝる聖者可能の定觀を說き、徐ろに機を調へやがて出世の本意を自開して、こゝに凡愚趣入の一道たる念佛を說かれたのが散善三觀九品の往生相であります。これ『觀經』一部所說の要旨、一に念佛往生の本願に歸することを、闡明せられたものでありまして、まことに散善自開の善巧と仰ぐべきであります。

第三門得益分とは、以上の御說法を聽聞した、韋提希夫人と五百の侍女ならびに無量の諸天たちが、廓然として大悟し、或は無生忍といふ他力の大信心を獲得し、或は阿耨多羅三藐三菩提心とて眞實の智慧を起し、または無上道心を發したといふやうに、それ〴〵利益を享受したことが說かれてある部分を指すのであります。この得益分についても、淨影、天臺等の諸師と善導大師とは見方が相異してゐます。諸師はこれを、聞經の利益として正宗分の一部に組み入れて居られてゐるが、善導大師は、十六觀全部の敎說を聞いてから——謂ゆる聞經の利益として、韋提希が御信心をいたゞいたのではなく、既に序分の欣淨緣のところで、和讃に「恩德廣大釋迦如來、韋提夫人に勅してぞ、光臺現國のそのなかに、安樂世界をえらばしむ。」とあるやうに、極樂淨土を見せて貰ひ。第七華座觀へきて、明らかに空中に住立したまへる、阿彌陀如來ならびに觀音勢至の二脇士を拜むことを得て、そこで正さしく無上の信心を享受したのである。それ故に、いま正宗分が終ると、端を改めて「說是語時」と說き起し、序分の見土を「時に應じて即ち極樂世界の廣長の相を見たてまつる」と示し、第七

華座觀の見佛得忍を「佛身及び二菩薩をみたてまつりて心に歡喜を生じ」と現はされたものであるから、これは既に得て居つた利益を、こゝに重ねて讃仰せられたものとみねばならぬ。さればこの一段は、正宗分と切り離して、別に得益分として解すべきであると仰せられて居られるのであります。

第四門の流通分は、正宗の説法も終了し、また韋提希等の得益をも明し畢はられたから、釋尊は阿難尊者に對して、上來所説の教法を忘失せぬやうにして末代に流通すべき旨を述べ。且つ所説のうちに觀佛と念佛との二つがあるが、佛の正意は念佛一行にあるのであるから、特に「汝よくこの語を持て、是の語を持てとは即ち無量壽佛のみ名を持てとなり。」と、名號の一法を信受すべき義を懇説して、非本願の定散諸行を廢し、本願の念佛一行を付屬せられたことが記されてあります。

第五門の耆闍分とは、以上で王舍城宮中の會座が終りましたので、釋尊は目犍連、阿難の二弟子を從へて、耆闍崛山へ歸られ、其處に世尊の御歸山を待ちまうけてゐた大衆達に、阿難をして宮中説法のありさまを復演せしめられます。さうして聽衆一同は、大いに歡喜して釋尊を敬禮したてまつゝた。といふ一段でこれで一經二會と呼ばれる、特殊の形式をもつた『觀無量壽經』が結了するのであります。

この『觀經』は、機の眞實を示されたお經といはれてゐますだけに、韋提希夫人を對告衆として、定散二善のまへに、いろ〳〵の機類を提示し、自力修善の難行を顯説して。最後に三福無分會無一善の惡凡夫を擧げ本願念佛の妙旨を述べ、萬機普益の敎意の奥義が明されてあります。すなはち、このお經は要弘相對の法門と稱せられて、表面には第十九願の自力諸善を、往生淨土の要門と

して詳説せられて居りながら、隱かに第十八願他力念佛の弘願門が併説されてあるのであります。しかも、最終の流通分へ參りますと、いまゝで、表面に堂々と詳述せられてきた、定散二善の諸行を非本願として廢棄し、他力念佛の一道が眞實の宗敎として、永久に付屬されてあります。かく『觀經』に表てむき諸行諸善が説かれたことは、自力心の強い人々を誘引して、本願の大道へ趣入せしめやうとの、善巧攝化にほかならぬのであります。

この邊で『觀經』に關するお話を、打ちきりまして、續いて第廿願開説の經と云はれる『小經』に就て申上げたいと存じます。

× × ×

さて、これから『阿彌陀經』謂ゆる『小經』に就て、一通をお話し致しませう。この『小經』は前にも申上げたやうに、かつ皆樣がよく御承知の如く、極めて簡潔なお經で、しかもその樣式が藏經中でも稀なものとされて居ます。お經の形式には十二通りありまして、これを十二分經または十二部經と申します。そのうちの優陀那(Udana)と云はれる形式のもので、無問自説と譯し、相手方の質問を待たずに、たゞ相手の名を呼び出すだけで、どし〳〵と自己の思想を充分に説き出されるものであります。この形式は、釋尊の感情が最高調に達したときに使用せられたもので、かの『法華經』方便品の三止三請と云はれる大切なところに用ゐられて居るやうに、こゝといふ場合に使はれてゐます。それがいまは、一經の始終にわたつて、しかも短かいお經の中で舍利弗よ舍利弗よと三十六返までたゝみかけて説いて居られるのであります。それでこのお經が短かくつても、いかに尊いものであるかといふことがわかるのであります。

この『小經』を三分科法に隨ふて窺ひますと、これは『大經』や『觀經』と

異つて序分には、たゞ證信序の六事成就だけで起發序はないのであります。それから正宗分に入れば、直ちに、極樂世界の依正二報を略讃し、續いて國土、寶樹、寶池、寶閣、寶樂等の依報莊嚴がさま〴〵に廣讃され、また次で、主佛の阿彌陀如來と、眷屬の聖衆方の功德がいろ〳〵に稱嘆されてあります。かく極樂淨土の功德莊嚴たる依正二報を讃嘆して、十方の群生に憧憬のこゝろを生ぜしめると。話頭を轉じて、こん度は、その淨土へ往生すべき因が說かれてゐる、すなはち「舍利弗よ、小善根福德の因緣を以ては、彼の國に生るゝことを得べからず」と、正面から自力雜善は、眞實報土に往生すべき因種でないことを說破し、かの報土に生るゝには願力の名號を信受するよりほかに道のないことを示して「執持名號」と說いて居られます。しかも、この「執持名號」の信心が、報土往生の正因であることを、自證と他證との二方面から立證してゐられるのであります。自證とは「我見是利故說此言」――我れこの利を見るが故に、この言を說く、といふので、他證とは、東西南北上下の謂ゆる六方恒沙の諸佛方が、各々その淨土に於て、間違いなき誠實の言葉をもつて「汝等衆生よまさにこの不可思議功德を稱讃する、一切諸佛に護念せらるゝ經を信ずべし。」と證明せらるゝのをいふのである。そのうへで、かゝる敎へは全く「極難信之法」であると、法の尊高さを示して、懇ごろに勸信せられてゐるのであります。以上で正宗分が終り、次で流通分となるのでありますが、このお經の流通分は「佛この經を說きたまふこと已りて、舍利弗及び諸比丘一切世間の天人阿修羅等、佛の所說を聞いて、歡喜し信受して禮をなして去りにき。」といふだけで別段に末代に流通せよとの付屬の御言葉もないのであります。けれども歡喜信受といふ、語句のなかに自づから付屬の意味が含まれてあるといふので、これ

を流通分とするのであります。

この『小經』は表面は、第二十願眞門自力念佛を廣說されたものとみるのでありますが、その底意は第十八願の眞實弘願を明されたものと考へられてゐます。それのみならず、第二十願の眞門念佛は、これを修する行者のこゝろもちは自力であつても、法は他力であり、また眞門自力念佛の機は、やがて眞實弘願に轉入すべき機であつて經文には明らかに五濁惡世の衆生と說かれてあるから。この經は、機法俱實の經として、かつ釋尊一代の結經として、淨土敎では尊重せられるのであります。

以上で、淨土三部經の概略を、できるだけ簡明に平易にお話し申上げたつもりでありますが、何分時間の都合上無理をして急ぎました爲めに、ところ〴〵難解と思はれる點もあらうと考へられますが、それは後刻、御遠慮なく質疑でもしていたゞくことゝ致しまして、最後に三經の全體について、いま少しく話して置きたいと存じます。

抑も〳〵、『淨土三部經』と一口に申しましても、そこに『大經』『觀經』『小經』とそれ〴〵卷帙が別れ、樣式を殊にしてゐる限り、何か特別に顯はさうとする趣致がなくてはならぬ筈であります。この點から、三經の一つ〳〵を區別して伺ふのを「三經差別門」と申します。また三經が、いづれも彌陀敎を光闡して居られるものとすれば、その間に自然、何處か融通無礙なところがあるであらう、との考へ方からいたしますと、そこに「三經一致門」といふ見方が出來てくるのであります。

初めに「三經差別門」といふのを、簡單に申上げますと。これは先に一寸お話申しました、わが親鸞聖人獨自の「願海眞假の批判」に根據する、謂ゆる「三

々の法門」――三願、三門、三機、三往生の法義を以て、三經を伺ふのであります。これによれば、『大經』は、第十八願――弘く一切衆生を救ふ本願であるから、弘願門または眞如門と申します、この弘願門が主として說かれたお經で。その相手の機類を、正定聚――間違いなく往生を得させていたゞく機と云ひ、またその往生相を難思議往生と云ふて、眞實報土に化生し、まことの悟りにめぐまれることを顯示されたものとみるので。聖人が「夫れ眞實の敎を顯さば則ち大無量壽經これなり」と仰せられたのは、この意味からであります。

次に『觀經』は、第十九願――肝要なる念佛の法に轉入する門戸と云ふ意で要門と名けらるゝ、定散の自力諸行をもつて、淨土へ往生しやうとする、邪定聚の人――邪とはいまは邪惡の義でなく、非本願の諸行を修するから、第十八願の正定聚の正に對して邪と云はれるのである。その人々が報土に往生せず、雙樹林下往生といふ方便化土に生れる法門を說かれたものとみるので。これは如來の大悲は、非本願の行者をも捨てたまふことなく、一應は化土に生れしめそのうへ自力無功の自覺心を發起せしめて、終に眞實の報土へ往生を得せしめやうとのお思召であります。

『小經』は、第二十願――自力念佛ではあるが念佛そのものは眞實であるから眞門と云はれる、不定聚の機が、本願の嘉號である念佛を、稱へる自己の善根と誤認して往生を期するので、第十九願の行者と同しく、化土に生れるのであるが、それよりは一歩進んで居るといふので、その往生相を難思往生と呼ばれます。これらの人々の往生の因果を說けるものとみるのであります。

要するに、三經はいづれも、如來無蓋の大悲を讃仰せられたものであるが、『大經』は正しく如來の本願たる眞實弘願の法がとかれたので、謂ゆる第十八

願を闡明せられたものであり。『觀經』は、法を聞持する人々の性格即ち機類に重きを置き、第十九願諸行往生要門の敎意を述べ。『小經』は、機法ともに眞實を說きながらも、人々の躓き易き自力執心の弊を、摘撥して第廿願眞門位の機相を宣說したまへるものと、區別して味ふのであります。

次に「三經一致門」と申しますのは、三經の說相が、それ〴〵その趣きを異にして居りますが、これはたゞ如來大悲海中の、一波瀾に過ぎざるものであり まして煎じつめれば佛智不思議の矜哀にほかならぬのであります。恰も川水が溪流となり瀑布となり、漱々らぎとなり洋々たる大河となりしてゐる。その一部分をみれば、大變な相違があるが、結極はたゞ一すぢの川の流れであるやうに。三經のひとつ〳〵を取り上げて論ずれば、そこにいろ〳〵と相異點もみられますが、これを深く嚙みしめてゆくと、自づから一味のものがらであることが肯かれてくるのであります。そこで親鸞聖人は『觀經』『小經』の上に、隱顯の二義を建立せられ、顯說から云へば、三經はそれ〴〵差別されるべきであるが、隱彰の義からすれば、三經はいづれも第十八願の一眞實に結歸するものであるとの見解を述べて居られるのであります。手近かなところでは和讃に、

「釋迦彌陀は慈悲の母父、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を發起せしめたまひけりと。」

大信海に引入せしめたまふ善巧を嘆じ。また『敎行信證』化土卷には「是を以て愚禿釋の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依りて、久しく萬行諸善之假門を出でゝ、永く雙樹林下之往生を離る、善本德本の眞門に廻入して、偏へに難思往生之心を發しき、然るにいま特に方便の眞門を出で選擇の願海に轉入せり、速に難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲ふ、果遂之誓まことに由ある哉。」と、三願轉入に約して自得を述べ、三經

の差別門は畢竟一致門と溶融して、具縛の凡愚を眞實の世界へ引導したまふ矜哀にほかならぬことを讃ぜられたのであります。

× × ×

甚だ不充分なことでありましたが、今回の講話はこれで一應終ることゝいたします。これが御緣となりまして、これだけ澤山のお集りのなかゝら、たゞのお一人でも、如來誠實のみ言のまへに、素直にひざまづいていたゞくことができましたなら、私にとつてこれに越した喜びは無いのでムゐます。

南無阿彌陀佛……合掌

彌陀の名號となへつゝ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　佛恩報するおもひあり

昭和六年一月十五日印刷
昭和六年一月十九日發行

「淨土三部經の話」急賣
【定價　金五十錢】

土塔叢書　第一輯

著者　華學默震
大阪市天王寺區大道一丁目一三三　超願寺

發行兼印刷者　森祐專
大阪市東成區南生野町三ノ四五

印刷所　弘濟會印刷部

版權所有

發行所　大阪市天王寺區大道一丁目一三三
超願寺内
土塔會出版部

土塔會復興に就て

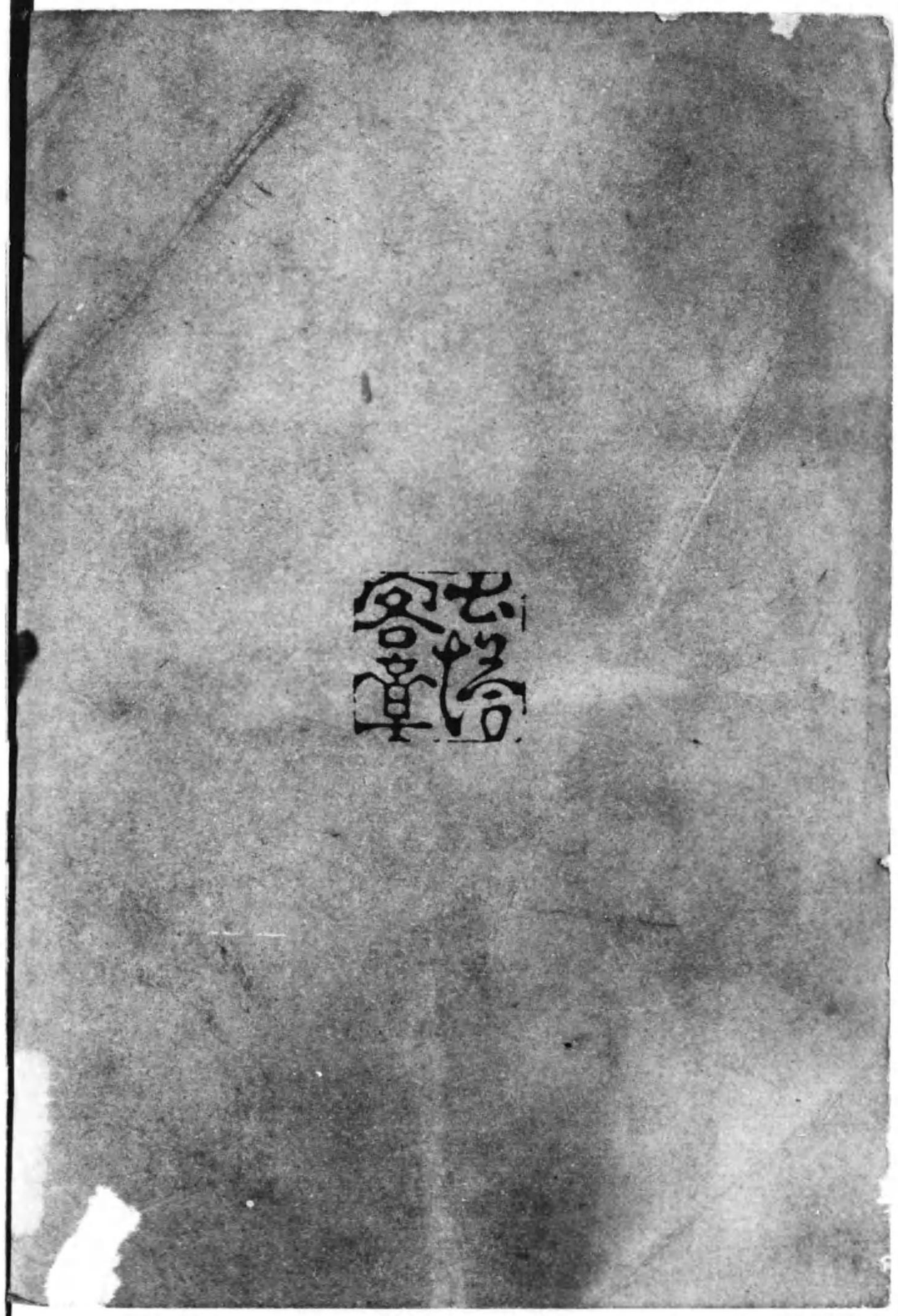
『天王寺土塔會、前々住上人御覧候テ仰ラレ候、アレホドノ多キ人トモ地獄ヘオツベシト、不便ニ思召候由仰ラレ候、又其中ニ御門徒ノ人ハ佛ニナルベシト仰ラレ候、是又アリガタキ仰ニテ候』

この御文は、蓮如上人石山本願寺を建立以前に、當寺を御掛所御坊として御在宿の折の御言葉であります。今其の祭禮は絶へましたが、せめて上人が殘された『アレホドノ多キ人トモ地獄ヘオツベシト』の血の出るやうな御言葉丈けは忘れぬやうに、と皆様のお勸めに依りまして、茲に土塔會の復興を見ることが出來ました。無始以來迷から迷へ流轉か續けて來ました私等、たま〳〵人界の生を受けた上からは、片時もゆるかせに出來ないのは御佛の教、それは眞實に生きる事の出來る道を聽くことです。土塔は開かれました、佛様は久遠の昔から私等を呼び續けられて居られます、私等は又佛様の御名を呼ばずには居られませぬ、重ねて申します、土塔は開かれました、されば聖人の仰せられたやうに、御同行御同朋となつて合掌と念佛をさせて頂きませう。

土塔山超願寺五十八世　森　祐　專

會の定め

一、毎月十九日午後二時と同七時に名士をお招きしまして、講演と說敎とをお願ひ致します。
一、毎月『土塔』てふ會報が發行致します。
一、春秋の二季には特別講演會が催します。
一、會員は一人でも多い程結構ですから、御家族も御入會を希望致します。
一、會費は毎月（會員一人）廿錢と定めました。

超願寺　天王寺南門
土塔會
電話天王寺一五八四番

終